

話題提供 2

保護者の立場から

須田初枝

(社団法人日本自閉症協会副会長)

須田でございます。御協力、よろしくお願いいたします。初めに、ショブラー先生と、それからエッケンロード先生に、きのうのお話につきまして、大変私たちは、親としていろいろな示唆を与えていただけて、そのことにつきまして、一言御礼を申し上げたいと思います。ショブラー先生、エッケンロード先生、どうもありがとうございます。

実は私、レジメを書いてございますが、もうこのレジメは自閉症児の社会自立に向けての支援体制ということで演題をいただきまして、書いてはみましてけれども、きのうのショブラー先生方のお話を聞いて、もうこれはナッシングでいい。なくて済むということを感じまして、きのうは大変、夜、悩みました。でもやはり、30分話をしなきゃならないということで、きょうはもう非常に緊張しましてここへ出ております。

実は、私は、今までお話をずっとしていただきました先生方とは違ひまして、私はあくまでも母親でございます。母親の立場で、やはり言いたいことを言わせていただきたいということを皆さんに一言申し添えたいと思いますし、母親であって、日本自閉症協会を35年間、一応みんなとともに自閉症のために場をつくり、環境をつくり、療育を研究し、お医者さんとともに医療的な問題も勉強しながらずっときた人間でございまして、いろいろとその間にはたくさん問題がございました。でも、ショブラー先生のように、35年、私もやってまいりましたけれども、ここまでつくることのできなかった自分の無力さを改めて私は、きのうからきょうにかけて感じております。

でも、日本でもこれから、これを土台にしてや

っていけば、日本に合った、やっぱりショブラー先生の理念のようなものを、自分たち、日本流の理念を打ち立てて、日本の風土に合った、やはり自閉症のこういう体系づくりをしていくことは、絶対にかけがえのないことだというふうに考えておりますので、そういう意味で、私のレジメをまた改めて、親としての考え方として皆さんに聞いていただきたいと思います。

実は、平成8年度、9年度と、厚生省から自閉症協会の江草会長に対しまして研究費が委託されました。それは何かといいますと、自閉症の研究なのですが、私もその班の一人でございまして、自閉症児・者の地域生活支援システムに関する研究というのを2年にわたっていたしました。そのときに、やはり親でなければできない研究は何かというふうに考えたときに、まずやはり実態調査を試みよう。そのとき、ちょうど約7,000人の会員がおりまして、全員にアンケートをお配りしました。大変詳しいアンケートでございまして、それに対してお答えをくださったのが1,649通でございまして、そのアンケートの集計の結果、年長児や成人になった自閉症の人たちの実情というものは、日本のIQ判定とは全然違った形で現状を生活しております。それは何かといいますと、やっぱり生活の適応が大変良好なケースと、全然だめなケースとありまして、ほとんど義務教育を終わった後の在宅をされているお子さんたちは、なかなか社会になじめず大変苦労して、親子自殺寸前の、そういう問題もたくさん出てまいりました。

これはやはりショブラー先生のような方がいて、もっと早くにあの子たちにいろいろなことを指導

していったらば、こんなふうにはならなかったのではないかというふうに、私は非常に感じておりますし、この35年の私の運動の結果、やはり先ほども話されましたように、やっぱりシステム、TEACCH プログラムのように、やはり理念を持ってきちんとしたシステム、それからIEPによる個別の指導プログラムをつくったらば、こういうふうな子どもたちは半減したのではないかというふうに私は考えております。

しかし、教育の中で、特にきょうは学校の先生が多うございますが、そのアンケート集計の中で、適応のよくなったお子さんたちというのは、やはり学校の先生が非常に理解してくださいます、親と一緒に子どもとともにずっと教育をしてくださり、親は先生とともに、子育てについて相談しながら発達を促していった、そういうお子さんが大変よくっております。ですから、そういう意味合いにおきまして、教育というものは、この自閉症の子の人生の土台を築く一番大事な時期であるということを私は痛感いたしました。

そのアンケートの中の教育に対する親の希望と申しますのは、やはり一に、個々のケースに応じた教育の徹底。やはりこれはIEPを大変望んでいることだと思います。それから、教師の自閉症に関する理解向上。やはり、ある程度、情緒学級などをお持ちで、そして先生方がともに研究していらっしゃる県は、大変そういう意味では理解を示していらっしゃると思いますが、片田舎にある学校、特殊学級、養護学校などにおきましては大変無理解で、子どもたちはその中で振り回されて、異常行動が、特に思春期になると大変な問題を引き起こして、学校でも持て余しているケースがたくさんあると同時に、家庭の中でも、本当に親が死ぬ思いと一緒に生活している姿が見受けられます。そういう意味で、教育がどれだけ大事かということと、それから先生の熱意、自閉症にとりつかれるような、そういう熱意が先生方におありになったらば、こういうふうじゃなかったん

じゃないかなというふうに私は思います。

すばらしい教育をしてくださる先生がたまたま出ますと、日本の風土というものは不思議なもので、あの先生は天才、あの先生だからできるんだといって、逃げ込んでしまう先生方も昔は多々ありました。今はないかもしれませんが、昔は多々ありまして、私たちは大変そういう意味で子どもの先生というものが、宝くじに当たるようなものであるなというふうにつくづく感じたわけなのですが、でもやはり、たくさんの研修を積み重ねてこういうふうになりますと、子どもたち、これから伸びていく子どもたちというのは、随分違った姿を私に見せてくれるのではないかというふうに思っております。

それからもう一つ、平成9年度には、厚生省が非常に自閉症というものを、ずっと三十何年、私どもは厚生省に参りまして、自閉症の正しい理解をしていただいて、自閉症単独の法制化をお願いしたのでございますけれども、自閉症は大きくなったら知恵おくれと同じなんだと。だから、知恵おくれの、今、知的発達障害福祉法と申しますが、それでくくってやっていけばいいんだというふうな考えをずっと持ち続けておりまして、文部省は割合に自閉症のために初めから情緒障害学級という形で、私たちの運動で、現在は4,000学級、全国にはございますけれど、やはり厚生省の方は非常に固うございまして、なかなか厚生省の壁を、ドイツの壁が壊れたのに、いまだにまだ日本の行政の壁は壊れない。これはやはり私たちの力が足りないのかと、つくづく思いますが、先日、初めて全国大会で、厚生省の障害福祉課長が、少し窓をあけて、少し光を与えてくれたようなあいさつをしておりましたので、これは、この期に乗じて、私たちは協会として、夢中になってやっぱり義務教育終了後のための自閉症の人の生活環境というものをどういうふうにつくっていくかということ而努力しなきゃならないというふうに私は思っております。

そんなようなことで、2年度のアンケートの、知的障害とそれから自閉症の違いというのは、やはり皆さんもよく御存じのように、行動面、社会適応面、それから言語の面、もう圧倒的にこのケースが違うんですね。それは、どこで調査しましたかといいますと、実は函館におしまコロニーというのがございまして、そこに200人の自閉症の、幼稚園からずっと成人まで施設がございまして、そこに約200人の自閉症がおります。あと、知的障害が約600人ぐらいおりまして、その中から各部から抽出していただいて、素晴らしい協力を得まして出たデータでございますけれども、完全に大変な状態を呈するのは、現状では自閉症だったわけです。ですから、そういう意味で、厚生省は初めてそれを見てわかってくれたのかなというふうに私は思っておりますが、これからやっぱりそれをものとする矢に、厚生省に見せて、ものとする矢として何か考えていただかなければならないというふうに私は思います。

それから、これからの自閉症教育に親として望むこととして、やはりショプラー先生が話されたようなことを、またあえて私が親として話すのは忍びないのですが、一応、書いてございますので話させていただきますが、やっぱり、個々のケースに対する連携システムをつくることが大変大事だと思っております。

それは、やはり誕生から義務教育終了までのきめ細かな記録帳が必要ではないかというふうに思います。それには、医師、教師、臨床心理士、ケースワーカー、そして何よりも親と子どものつながりの中から、正しい観察と記録と、関係者同士の細かな話し合い。それも、遠慮しないでちょうちょうはっしやる、そういう話し合いが持てたらすごくいいと思いますし、また、それから言語の発達の過程をぜひ書いておいてほしいということと、家庭と学校との自閉症状の違い。これは、まさしくうちの施設でもそうなのですが、成人になっても、うちにいるときの自閉ちゃんの状態と、

施設にいるときの状態がくると違うんですね。ですから、あれを何とか一緒のようになるような形にしてやらないと、親はやはり子どもを施設に捨ててしまうような状態になるように私は感じますので、せめて親が生きている間は、私は、家庭というものに帰ってきたときに、その子の座る座があることがやはり一番彼らにとって幸せなんじゃないかなというふうに思っておりますし、まして親たちが協力してつくった施設であるとしたら、私は絶対に子どもを施設の中に捨てるようであったとしたら、私はここに入所している子どもにとって、大きな罪を犯したというふうに思っております。ですから、常に親にはそういうことを話しながら、でも、できるだけ家庭で扱いやすいようにしてあげなければ、親はどうにもなりませんので、やはりそれをするのが福祉法人けやきの里であるというふうに思っております。

それから、学校での友だち関係のいいこと、悪いこと。それもすべて皆さんで話し合って考えてほしいし、それからまた喘息とか、肥満がすごく大きくなるとあるので、これはやっぱり問題だなというふうに思いますし、また、歯が非常にぼろぼろになって施設に入ってくる人たちがおります。ですから、小さいときから、やはり歯の治療というのは、すごく大事だなと思いますし、現在はうちに八十数人の入所者と通所者がおりますけれども、皆、看護婦さんが大変よくしてくれまして、歯医者さんに全員連れていって歯を直してくれておりますので、歯が痛くて困るというようなことは、今は、15年たちますが、なくなりました。

そんなようなことも、やはり記録の中に書いておいていただければ、大変ありがたいなというふうに思いますし、それからもう一つ、学校で担任が、日本は大体二、三年でかわったり、養護学校はどうか知りませんが、かわる。そのときに、やはり、またゼロからやり直さなきゃならないというようなことが非常に見受けられておりますので、やはりこの記録帳というものをしっかりと踏まえ

て、次を引き継いだ担任の先生がそれを見ればすべてわかるようにしておいてくだされば、子どもも混乱しないで済むというふうに私は思っております。

大体、親として望むことは、やはり全くショブラー先生と同じようなまでにはいかないまでも、先生と、それから親とが連携を結んで、しっかりとシステム化して子どもを育てていくことが大事だというふうに思いますし、ぜひ先生方には、先生方が考えて、今の現状ではとてもショブラー先生のようなわけにはまいりませんけれども、きょう、ここにいる先生、残られた先生は、ぜひそのことを考えて、現場でやってみていただきたいというふうをお願いする次第でございます。

それから、自閉症の社会自立に向けての支援ということで、福祉施設で自閉症の人を預かりますと、大体、もう本当に大変でございまして、何が大変かと言いますと、先ほどから話しました固執とか、行動異常とか、言語がなくて思うようにあれできないで、他傷、自傷を起こしたり、それから社会能力がなかったり、何にもする気がなかったりというようなことがあるものですから、そういう意味で、教育の中で、やはり自閉症状特有の自閉症状の軽減をやっぱり創意工夫して皆さんで考えて、個々に合わせてやっていただけたらば、受けた福祉施設としては大変ありがたいことで、ゼロからではなくて、やはり引き続いて、もっともっとその子に有意義な人生を歩むために有意義なことをしていくことができるというふうに思っております。

1週間たつてくると変わる子があります。入所して。それは、何で変わったかということが非常に私にとって不思議なのですが、やはり3年たっても変わらない子もあります。それはやはり過去の、やはりそういう生きてきた人生というか、今までの人生がどうあったかということをもう一回見きわめて、もう一度福祉施設の中でそのことを考えなきゃならないというふうに思っております。

ます。

それから、個々の能力の発見。これは、実際、ショブラー先生は、強さとそれから弱さがあると。強さというのは非常によくわかりますし、いいところですね。能力。私は、能力とは思わないのですが、ある一定のものができるとか、そういうことと、全然何もわからないということがありますが、実は、その強さ弱さをよくわかるということは非常に大事なことでございまして、これは私の子どもの話になりますけれども、実はうちの息子は、入学するときに字が書けませんでした。1年、就学猶予をして、字が書けなかったんです。それで、たまたまうちの息子は、山手線、京浜東北線の駅を全部覚えていました。机の上で字を教えてもなかなかわかりません。それで、私はメモを持ちまして、電車に、彼の強いところ、好きなところをねらって、電車に乗りまして、そのメモを持って、浦和なんです。私は、次の南浦和に降りたときに、降りて、メモにここの駅はどこと聞くと、南浦和とは言うんですね。そうしたら、昔は、今と違って、水色のこういう看板が柱に立って、平仮名で「みなみうらわ」と書いてあったんですね。だから、南浦和の「み」と言って、私が書くと書かせて、それも1年やりました。そのうちに、ふと「すだひろし」が書けるようになったらば、字がふわっと広がっていつて字を覚えたんです。それと同時に数字を覚え、それから漢字も小学校1年生ぐらいはわかりまして、それで学校に入学したときに、何か提出するときに「すだひろし」が書けるようになったのですが、やはりそういう弱いところも、やはり強いところを使ってどうやって直すかということ、私はこれはたまたま駅が好きだったということで皆さんに説明しているのですが、そのほかにまだまだ、今、30分で話せということなので、子育てについては2時間も話さない私は気が済まないんですけれども、そういうようなことがあったということも、先生方、どんな重い子でも希望を捨てないで、何

か強いところがなかったら、褒めることをつくってでも褒めて、そして、いい気持ちにさせておいて、嫌がることをさせてあげるという、そういう弱いところをどう埋めていくかということも、先生たちの知恵で個々に考えていただけたら、随分異常行動がなくなってくるのではないかなというふうに私は思っております。

そして、やはり、これからの社会福祉基礎構造改革、先生方、御存じだと思いますが、これからやっぱり子どもたちは、障害者は、皆、社会の中で、地域の中で、普通の方たちとともに人生を送っていくという、そういう構造改革が厚生省の考えで始まりますけれども、地域の中でやはり理解者を求めるということは非常に自閉症の場合には至難のわざでございまして、でも理解者がなければ相当数の自閉症の人たちは、自立していくことはできません。地域の中で生きていくことはできません。ですから、そういう意味におきましては、やはり少しでも、やっぱり理解者を広げなければならないということで、先生方もぜひ地域の中にそういう理解者を広げることに、自閉症の人たちを地域の中に連れ出して教育していただきたいなと思います。

そういうことも、ショブラー先生の話の中にあっただと思いますが、あの子たちは、環境をつくって経験させる中でいろいろなことを少しずつ教え、小さいときから教え込んでおくと、一つのことがわかるようになると、ずっと広がることもあるんですね。ですから、やはり、もうこの子はだめだと思わないで、1年スパン、2年スパンでやっていると、先生があきらめたころに、ぱっと花咲いて、ふわっとできることがあります。そういう経験のある先生も、ここに何人かおありだと思いますけれども、絶対にその子の現状の行動障害にばかり目を移すのではなくて、きのうの話の氷山の話のように、氷山の下に隠れている部分が何であるかということをしつかりと踏まえて、その子をIQとか判定で評価するのではなく、やはり考え

て、その子が自立に向けてどういうふうにしていったらいいかということをぜひ考えてほしいし、また地域社会の一般の方たちにどうやって子どもたちを理解してもらうかということになると、これは私がいつも持論で、文部省にしかられるのですが、今、佐々木先生も聞いていらっしゃるかもしれませんが、また須田さんやってるなって言われるかもしれませんが、統合教育のために私は通級制をつくったんです。それは、言葉がたくさんある中で自閉症の子を育てなさいということで、我々が親の会をつくったのは、まず学校教育のために親の会をつくって、教室をつくったんですが、通級制で、一般の人のリズムを自分の体に植えつけるためにということをやったんですが、現在は全然そうではございませんで、やはり交流教育になってしまいましたけれど、今、インクルージョンという、そういうことが世界的に教育の場で言われておりますが、障害者に一般の方が近づいていくと言いますけれども、私、両方やってほしいと思うんですね。一般の方は、なかなか近づいていきないうです。小さいときから、肌と肌と接して、ともに生きることによって、非常に理解が増すんですね。小さいときに、そういうことをすると。ですから、せめて幼児教育の中では、やっぱり、こういう子ども、怖いけれども、こういうところがあるんだなということが小さいときに肌で感じると、皆さん、それぞれ心の中に違ったものを持つのではないかというふうに思いますし、そのかわり、嫌な人もいるかと思うと、大変よく面倒を見てくれる人もいます。無関心な人もいます、これが社会を組み立てているんですから、やはり、そういう中で生きていくとしたら、せめて理解のある人がそういう中からたくさんあらわれることを私は願っておりますし、うちの息子が、実は普通学級で3年生から中学校1年まで一緒に、学習は全然ついていかなかったですけれども、やはり、そういう中で育った方たちが、例えばうちの施設をつくったときに、寄附をもらいに行ったときに、三菱重

工だったと思いますが、そこに同級生の女の子が社長の秘書をしております、須田君がここにいらっしゃるんだって、社長さんを説得してくださいまして、30万円、ぱっと出していただいたというような、そんなこともある。やはり、そういう輪がずっと広がっていくということを考えますと、やっぱり普通の人たちに言葉とか本だけで教えるのではなくて、じかに教えていただくことが大変重要なことで、心の中にすばらしい何か理解が培われるのではないかというふうに私は思っております。

最後になりましたが、実は、これは先生たちに親としてぜひお願いしたいことなのですが、実は、ここに自閉症の親さんが少ししかいないので、私は親の立場で言うと、後で親からみんな締めつけられるかもしれませんが、すごく勉強しているんですね、今、自閉症の親は。先生よりも勉強している人が多うございます。それから、ましてインターネットで、今の若い方は世界的なそういうあれを勉強しております、恐らく先生たちに、今は、こうなっているんだからこうしてほしい、ああしてほしいという要求が、我が子のために非常に出てくると思うんですね。それに対して、先生は専門職ですから、非常に嫌な思いををすると思うんです。でも、親の熱心さというのは、やっぱり子を思うばかりにそうなるので、先生方、そういうときには少し我慢していただきたいというふうに思いますが、ともにやっぱり考えていていただきたいなというふうに思います。

私は、親の会で呼ばれますと、親には必ず言います。親は、自分の知識をひけらかさないでほしいと。やはり先生とともに考えて、ともにやって、先生が考えたような形にしてあげて、先生を喜ばせないと、先生が子どもに対してそっぽを向いてしまうから、先生をまず喜ばせることが大事なん

だということをしっかりと腹に据えてやってほしいと。もう、ほとんど私は、全国を回って講演しておりますので、そういうことを言って、親を笑わせながら親の心の中にそういうものを入れ込んでおいているつもりですが、やはり若い方は、私たちのように行き場が全然なかった親と違って、すべてある中に、今、学校だって行かれますし、どこだって行かれますから、我慢することができないということは、本当に残念なんですけれども、それは仕方のないことであって、ただし親として、やはりやる気をなくすような、そういうふうなことをすると、これはおしまいになってしまいますので、ぜひ先生方、その辺も踏まえて、親、子どもを助けると思って、ぜひ親とともに考えて、そして子どもが人生を豊かに生きていくために、どういう基礎づくりをしたらいいかということをしつかりと考えてやっていただけたらありがたいと思いますし、最重度の子どもたちは、言葉はなく、表現力もなく、うつろな目しておりますけれども、あの子たちは絶対に自尊心のあるすばらしい、表現はしないけど、非常に自分に自尊心を持った子どもたちです。ですから、ああいう子どもたちは、やはり三つ褒めて一つしかってほしい。しかるのも、簡単にしかってほしいですね。褒めるのもオーバーに褒めてほしいです。だから、三つ褒めて一つしかり、できないことをできるように手助けしながら、褒めながらできないことをしていただきたい。そうして子どもが少しでも変わるといことは、親にとっては本当に先生と信頼のきずなが固く結ばれることになると思いますので、その点、くれぐれも、ここにいる全員の先生に、私から、全国の8,000人の会員の親のかわりに、私が先生にお願いする次第でございます。以上でございます。(拍手)

討論

司会（寺崎裕志）：それでは、ただいまより、パネルディスカッションの方に入らせていただきます。

午前中、先生方からの御質問、たくさんございました。それで、今から4人の講師の先生方にいろいろと御意見等を言っていただくんですが、皆様の方からの御質問等にお答えしていただくような形で御意見もお話ししていただこうかと思えます。

そこで、大まかに分けたんですが、ショプラー先生には、重度の子どもたちの指導についてお話ししていただこうかと思えます。特に、御質問の中にあったのは、非常に認知機能、表象機能の低い自閉症の子どもたちに、どうやって視覚的な手がかりを理解していったらいいのだろうかというような御質問が一つございました。それから、パニックについて、午前中も御質問が出ておりましたが、パニックについては、3人の方々から御質問がございまして、パニックについてどういうふうに理解したらいいのか。パニックというのは、あってもいいのかということで、それと、もしパニックになったときの対処法について教えていただければということなんです。対処法というのは、事前にいろいろ子どもたちの理解をするということではなくて、いざパニックになったときに、どういうふうにしたらいいのかというような御質問です。それに関しまして、ストレスの解消の仕方、何かプログラムのようなものがあるのかどうなのかというような御質問がございました。

それから、エッケンルード先生には、学校の1日の流れ、スケジュールとか、グループの活動があるのかどうなのか。また、ワークシステムの中

で、作業的なものばかり多いのではないかと。ほかには、何かないのかというような御質問です。確かに、教科学習等もしておりますので、そのあたりも学校のお話をしていただきたいと思います。そして、一緒にI E Pを作成されるときに、どういう点に気をつけられているか。また、そのI E Pの目標を次の目標に設定するとき、どういうところで次の目標を設定するのかということ。

それから偏食についてなんですが、これはショプラー先生、佐々木先生にも一緒に御質問だったんですが、偏食の指導は、どういうふうにしたらいいのか。それから、石とか、いろいろなものを食べる異食行動ですね。それについていい指導方法がありましたら教えてくださいということで、これにつきましてもエッケンルード先生の方から、何か指導法がございましたらお願いしたいと思えます。

それから、佐々木先生には、心の理論と発達障害の関係についてということで質問がございました。佐々木先生の中に心の理論ということが載っていたということですので、それについて、もう少し具体的にお話をしていただきたいと思います。それにつけ加えて、心の交流についての質問もございました。

それから、有澤先生に関しましては、日本における個別の指導について、もう少し詳しくお話ししていただきたいと思いますということと、日本でのTEACCHというのは、非常に難しいのではなかろうか。今の体制の中では非常に難しいのではなかろうかというような御質問で、じゃあ、これから日本の中ではどうしたらいいのかということ。これにつきましては、佐々木先生にも御助言いただければというふうに思えます。

今の質問を加えまして、先生方にお話をしてい

ただきまして、それぞれのお立場から御意見を付け加えていただければというふうに考えております。それでは、最初に佐々木先生の方から、よろしいでしょうか。○佐々木 私に与えられたテーマは、偏食がまずございます。自閉症の人は、先ほどからお話ししましたように、私たちと違うところとはたくさんあるけれども劣っていることではない。違うということがありますね。それで、この違いは何かというと、知覚や、味覚を含めて知覚が違うんですね。それから、日本で行われた一つの研究であります、ある新しい薬が開発されて、成果があるかもしれないというふうに思われたときに、アミノ酸ですね、ある神経情報伝達物質、ニューロトランスミッターと言われる、その材料になるアミノ酸があります。フェネラニンとか、そういうものを経口投与をしますと、血中濃度は普通の人のように上がらないんです。それは、自閉症の人は、消化吸収ということも含めて、かなり多くの人が我々とは体質を異にするところがあるというふうなこともわかりました。

アミノ酸は、御存じのように、たんぱく質の合成成分で、一般に自閉症の人は、たんぱく質は好きですね、食べるのに、お肉とか。多分、せっかく摂取しても、取り込まれ方が非常に弱いというふうなことがあるために、もしかしたらたくさん食べるのかもしれないし、好むのかもしれないんです。でも、それはわかりません。けれども、血中濃度を、非常に人体に害を与えることが非常に少ないと言われる放射性同位元素でラベリングして経口投与をしますと、血中濃度が上がっていく速度がいろいろな人であるわけですが、日本の神経科学者が、バイオケミストたちがやってみた結果では、非常に血中濃度が上がるのが弱い。要するに、消化管からの吸収が弱いということでありました。これは、かなりの自閉症の人にかかなり共通した特徴だったそうであります。ですから、私たちの感覚で、これは偏食だとかどうだとかというふうなことを一方的にやるのが、どんなに自閉

症の人を苦しめるかということもあるんです。食べたものが、私たちとは違った消化吸収の仕方をされている部分もあるんです。わからないところもまだまだありますけれどもね。理解できるところもありますけれども。

自閉症の人から見れば、こっちが偏食かもしれないのであります。もしかしたらですよ。どのぐらいどうかということは、お互いの立場があるわけでしょう。だから、何でも我々の基準を基準として与えるというのはいけなくて、私は基本的には、ほかの先生方がどうお考えになるかわかりませんが、成長や、体の成長と言っているのかね、栄養障害を起こしていないし、体も丈夫で病気もしないし、身体的に健康であつたら、それは何を食べていたって偏食ではないのではないのでしょうか。いろいろなものを何でもよく食べるけれども、始終病気をしているという人よりは、私はよっぽどいいと思います。自閉症の人は、あんまり病気をしないでしょう。学校を休みますか。例えばあります。インフルエンザも、むしろ自閉症の人はかかりにくいのではないのでしょうか。

というふうなことを含めまして、基本的には偏食を私は無理に直そうとはしない。私は基本的にしません。自閉症の人にとって楽しみは、私は、我々の文化の中で生きていくための楽しみは少ないと思いますからね、基本的には。食事の時間まで苦痛を与えるということは嫌ですから、できるだけ彼らが好きなものを用意しようというふうな心がけはしてもいいと思います。彼らが好きになれるものを少しでも工夫して献立に用意しようとする努力は、いろいろなところでしましようということを、学校でも、保育園でも、いろいろなところでお話しますけれども、我々が一般に標準として食べるものを、その方法で食べなくてはいけないというふうにはしません。仮に、偏食がひど過ぎて、健康を明らかに害しているというふうな、あるいは成長をはっきり損なっているというふうな兆候が見えれば、それは別ですが、私は

そういう人に出会ったことはないんです、今まで。ですから、基本的には偏食を矯正をしようというふうにしないで、待っているということが多いです。だんだんに我々の食事の好みに近づいてくる人が私は多いと思っておりますが、皆さんと少し議論ができればと思いますね。

それから異食、パイカと言いますね。食べ物でないものを食べる。雑草を食べるとか、石を食べるとか、消しゴムを食べるとか、粘土を食べるとか。極端な場合には、自分の髪の毛を引き抜いて、それを食べているというふうなことをする人なんかに会いました。でも、これは偏食とかそういうものとは、およそ私は違うように思いました。今まで私は、かなり強い異食を示す人を3人ほどすぐに頭に思い浮かびます。これは私は、一種のパニックの状態に近いほどの混乱の状態にこの人たちはあったなということを思い出しますし、はっきりそう思える人もいます。

ですから、何ていうんでしょう、テンプログランディンさんも言っていましたけれども、自傷行動をしているときの自分というものは、痛みを感じないんだそうです。それはだけど、その背景にある不安と興奮が強い、大き過ぎるからということでありまして、ある種の不安や興奮を和らげようとする行為でもあるんですね。自傷行動の場合。どうも、異食と言われるほどひどいものを口に入れて飲み込んでしまったりなんかするようときには、慢性的なパニック。パニックというのは普通は急性に訪れるものですが、慢性的な一種のパニック状態みたいなものを、ということは、それほどの不応状態にあるということを私は思います。自分の経験では、3人ほどの人に対してそのように思います。

それで、これはエリック・ショブラー教授への質問だということだったんですが、パニックの理解をということではありますが、これは、異食に関連して一言お話をと思いますが、パニックということは、だれにでもあり得るわけですね。皆さん

にも、私にもあります。自分の過去の経験や知識や技術では理解できない、あるいは解決できない、あるいは脱出できないような急激な危機が迫ったときに、だれでも感じるものだと思います。タイタニックに乗り合わせたらいかがでしょう。神戸でありました震災の真ただ中にいたらどうだったでしょう。だれでもなるんですよ、パニックというのは。自分のこれまでの知識や経験、技術では理解もできないことが起きた。あるいは、そのことを解決もできない、あるいは脱出することが当然できないというふうな状況に置かれたら、だれもがパニックになりますね。

ところが、私たちにはそういうことがめったに起きないというのは、かなりのことは理解ができるからですね。ところが、自閉症の人は、私たちから見るとなぜこんなことがというところが私たちのように理解できていないわけです。私たちのように感じ取れない。ですから、私は簡単にパニックになるように見えるわけです。だけど、自閉症の人のことをこちらがよく理解して、その人に了解できないような、理解できないような状況を与えなければ、この人たちはパニックにならないんですよ。これは、きのうからお話ししたとおりであります。

きのう、私がちょっとしたお話をする前にこの御質問をお出しになったのなら自然なことですが、あの後にこの御質問をお書きになったのでしたら、どうしてこの方は御理解なさらないかと私は思います。どうしたら理解していただけるかなと、この人に、というふうに思いますが、多分、その前にもう既にお書きになったのだらうと、こういうふうに思うんですね。パニックというのは、だれもが起こすことですよ。そういうふうに私は思いました。後でエリック・ショブラー先生がどうおっしゃるか。

心の理論についての御説明です。心の理論というのは、相手が何を考えているか、相手が何を信じているか、そういうことが理解できないときに、

そのことを理解できるできないということに関する一つの理論ですよ。相手の信念を了解するという。自閉症の人には、非常に苦手な領域です。簡単に言えば、この人たちは、視覚的に情報をとらえる力が強いということは、視覚的に確認できないことをとらえる力が弱いと、こういうわけがあります。そうすると、相手の考えていること、相手の信念、それは目で確認できないわけですよ。ですから、そこがわかりにくいわけですよ。あるいは、そのことに対して共感できないわけです。

具体的に英国の人たちが、ここの理論の研究は、セオリー・オブ・マインドといいますね。TOMと言います。その研究は一生懸命なされていて、自閉症の人にとっても発達しにくい領域だということをよく言われます。アメリカにこういう遊びがあるかどうか、鬼ごっこという遊びを日本の人はしますね。あるいは、隠れんぼでもいいです。そうしたときに、自閉症の人は、恐らくめったに参加できないんです、本当の意味では。なぜ参加できないかということ、鬼になることの意味というのがわからないんですね。ある瞬間から、ある人にタッチされたその瞬間から、自分には鬼という役割の意味がついて回る。鬼ということに関して、みんながどういう共通理解をしているか。鬼になることを、どんなにみんなが嫌がっていることなのかということがよくわからないですから、鬼であろうとなかろうと、あんまり気分の変化がないのであります。自閉症の人は。ですから、鬼であることをやめようと余りしないし、鬼にされることを何とか逃れようとする努力をしないわけですね。というのは、鬼の意味がよくわからない。鬼にどういう役割がくっついているかというようなことがわかりませんから。ですから、視覚的に確認できるトランプゲームとか、ジグソーパズルとか、日本では神経衰弱なんて言われるトランプの神経衰弱になりそうなゲームがありますが、ああいうことはよくできるけれども、鬼ごっこ、隠れんぼができない。そのできなさということの裏に

は、セオリー・オブ・マインド、心の理論の発達が悪いと、こういうふうに言われる部分があるんです。おわかりいただけでしょうか。どういう実験をして、どういうふうな確認をしてこういうことを言ったというようなことはありますが、時間を私だけで使ってしまうのはいけないでしょうから。

そういうことは、発達障害の人すべてが持っているわけではなくて、例えばダウン症候群の人たちは、心の理論の発達はいいです。自分がこうすると相手はどう感じるかということをいろいろなレベルで感じます。だから、相手が喜ぶことをしようとしますし、相手が悲しむことは、自閉症の人よりはずっとしないでおこうというふうにします。こうするとお母さんが喜んでくれるから、こうするとお父さんが喜んでくれるから。ですから、子どもにたくさんのことを強要し、期待をする育児をされ過ぎると燃え尽きるんですね。バーンアウトをするということがありますね、ダウン症候群の人は。自閉症の人は、そういう意味での燃え尽きというのは、めったにしません。絶対という意味ではありませんが、非常にしにくいということがありますね。

ですから、発達障害の人が、みんな心の理論の発達が悪いというわけではないんです。かなり自閉症、自閉症連続体、オーティズム・スペクトラム・ディスオーダーと言われる人たちに、いろいろな程度に共通している問題ですね。発達しにくい領域ということをお理解いただければと思います。

それから、同時に心の理論と関連づけてかもしれません、心の交流ということについてどう感じますかと、こういうお話がありました。私たちは、心を通わせているつもりで接していることがあります、自閉症の人に。本当に通っているかどうかということが大変難しいことがあります。通わないというわけではありませんが。相手を大切にする、相手の気持ちを尊重するというふうな気持ち

を持っていろいろ接することによって、心は通い合っているというふうに思っておりますが、私は、でも TEACCH の人たちと接するようになって、意味を交換し合う、あるいははっきり意思を交換し合う。意思を交換し合う、意味を交換し合うということをしっかりする方が、はるかに心は交流するように思います。心の交流はいいように思います。

恐らく、お互いに自分の意思をしっかり確認して交換し合える状況をつくる方が心が交流するんですけれども、そういう方法を持ち得なかったときには、何となくとにかく優しく接触して、相手をできるだけ受け入れている気分で時間を共有し合うと心は通い合っているからというふうに我々セラピストは思うしかなかったと。私が一緒に小児療育相談センターで働いたサイコロジストの人、二十何年も前には本当に言っていました。自分たちには、優しさしかサービスをするものがないと、自閉症の人には。笑顔しか差し上げられないと。これは本当に正直な気持ちで率直な人たちだと思いました。優しくする以外に、サービスがこの人たちに提供できないじゃないかと、そういう時代がありましたですね。けれども、本当は私たちはこう思っているんですよということを相手に伝えてあげる。あなたが思っていることを、こうすれば私たちは理解できますよということを教えてあげるといことの方が、本当は、心の交流がよくできるように思います。TEACCH へ行ってみると、ノースカロライナへ行ってみますと、改めてそういうことをしっかり教えられるように私は思えるんですね。

それから、TEACCH プログラムを日本で実行していくには、今の体制では困難だとおっしゃったと。今のどの体制を、先生の学校教育のトレーニングの体制で困難だとおっしゃったのですか。どういうところで困難だとおっしゃったのでありましようか。

例えば今、私は岡山県の倉敷市の大学に週に3

日行くようになりました。大勢の人が周辺に集まってきてくださいます。お母さんたちを中心にしたサービスを月に1回、2時間余り大学でやっています。そうすると、TEACCH の小さなモデルを家庭でいろいろとおやりになってみるわけです、生活のモデルを。きょうは、こういう来客がありますというようなことを、その人の写真があれば、ホワイトボードを用意されて、そこへマグネットで張っておく。きょうは特別、ここへ買い物へ行きますというようなことを張っておいてあげるとか、平素やらないことを、きょうはあるというようなことを前もって予告しておいてあげるといようなことをするだけで、どんなにしのぎやすいか、過ごしやすいかですね。短い言葉に、ピクチャー・ディクショナリーという、絵による補足事項をつけながら、この子とコミュニケーションをすると、どんなに生活がしやすくなるかといようなことは、大勢の方が言っておられます。人が人を呼んで、実に60人も70人も、お母さんが毎月、あの小さな町の方が集まっておいでになるくらいで、こうすると、こんなにこの子と一緒に日常生活がしやすくなりますよということを次々にお母さんたちが確認していかれるわけであります。それは TEACCH モデルの小さな応用であります。

それから、岡山県には誕生寺養護学校という学校があります。一度お話しに行きました。そうしましたら、先生たちは大きく感動してくださいました。実際に、どこの学校でこういうプログラムを豊かに実践していますかと言われましたので、私はいくつかの学校といくつかのクラスと、それからいくつかの施設を紹介しました。先生たちは手分けをして、そういうところを見学に、研修にいらっしゃって、そして今、一生懸命取り組もうとしていらっしゃいます。多分、今の体制でも、かなりのレベルまで、その学校は実行されるだろうと思いますし、もう成果を確認されつつあるわけでありまして、どこが困難なのでしょうとかとい

うことですね。

横浜市の親の会の人たちは、すぐこの近くに、ヒガシマ工房という通所更生施設をおつくりになって、大きな成果をお上げになりました。横浜市はそのことを確認してくださいました。TEACCHモデルであります。一番最初に勤めた20人ぐらいのスタッフの人は、全員、ノースカロライナに1週間ずつ勉強に行かれたのです。多少ぜいたくなことをしたというふうには思います。でも、そのぐらいのぜいたくは、十分価値があったというふうに横浜市もおっしゃっているわけでありまして、成果が上がりました。スタッフも驚きましたけれども、そこへ御自身の青年を通わせていらっしゃる御家族もやはり驚かれました、基本的には。成果が確認されて、入所更生施設をつくりました。定員40人で小グループ制にしてあります。私は、入ってこられるときに、一度に40人もの方が入ってこられたら混乱するから、10人ずつぐらい、何回かに分けてお招きしたらいいと、こう言いましたが、彼らは平気ですと言われました。大変な、大層な自信だと思いました。密かに遠目で心配していましたが、何も混乱は起きませんでした。いい施設をつくってくださったです、確かに。設計も何も。みんなに個室があって、小集団でグルーピングができ、自分の部屋に帰ることもできて。全体では40人ですけれども、数人ずつが家族的に住むような雰囲気になり、個室があって。珍しく、東京都の建築のフェスティバルで、福祉施設としては初めて特別賞を取った、入賞したという、見事な設計と、見事なものだと私は思います。でもそれは、TEACCHモデルというものを取り入れた通所施設のときに成功したことが横浜市に信頼を得た。ですから横浜市は、そういう施設を、入所施設をつくってくださった、次に。スタッフが望むようにつくってくれたと基本的には思います。

だけど、どの人を入所者として選ぶかということについては、横浜市の方に選ばせてほしいと。

困っていらっしゃる方から入れるからと。その人たちを、実に40人一度に入れたんです。実際には、38人の人でありました。2人の人が次の週にお出でになりました。御家族の事情があつて。でも、混乱しませんですよ、それは。

そのように、こちらが自閉症の人のことをよく知って、そういう環境を整えて待つてさえいれば、その人たちは大きな混乱も何も起こすことがないわけです。これだって TEACCH の応用じゃないですか。現体制では困難というのは、どこのところを困難とおっしゃいましょうか。彼らは、まちで…。

○司会(寺崎) 先生、申しわけございません。困難というのは、チームで評価、診断してプログラムを立てていくと、チームで。そういうことなのですが。今の学校では、ちょっと難しいんじゃないかということなのですが。

○佐々木 そうですか。わかりました。それじゃ、こういうお答えの仕方ではだめですね。

○司会(寺崎) いや、それも結構なんです。その実践の中で、可能な限り手がかりがありましたらということでしたので。

○佐々木 そうですか。わかりました。それで、地域社会での生活も含めて、彼らはいろいろなレベルに合ったところへ就労に行きますし、就職をしますし、日常の例えばファーストフードの利用の仕方なんかも、どんどん自分でやっていくようになります。言葉のない人は、書いてもらったものを、この人の意思を代弁したものを書いてあげるわけでありましてね。日本流に言いますと、例えば「このハンバーガーを下さい」と、こういうふうに自分で言えないんですね。そうすると、それを書いたものをあげるわけです。普通、私たちが行きますと、マクドナルドのスタッフの人は、トレーニングを受けていて、「お召し上がりですか、お持ち帰りですか」ということを聞きます。そういうことを聞かれちゃ困るんであります、自閉症の人は。うまく答えられないから。だから、必ず

最初に「持ち帰ります」と、もう書いておいてあげるわけです。相手が聞きそうなことを全部書いておいてあげるんです。「お飲み物はいかがですか」と必ず聞きます。ですから、最初に「オレンジジュースを下さい。これですべてですから、何もお尋ねにならないください」と。そういうふうに書いておいてあげて、1回、2回、練習をしますと、実に安定して利用できるわけであります。自分でいろいろなことを言える人には、そんなことを書く必要はありませんですよ。ですから、その人のレベルに合わせて、そこでの適応行動を援助する。しかも、相手のお店にもお願いしておくわけであり、そういうことを。こういうものを持って我々のところから青年が行きますからお願いしますという。それで、その自閉症の青年には、どこでもこういうことが通用するんじゃないくて、あそこのお店なんだということを教えておく。そういうものをだんだんふやしていくわけですよね、次々に。そして、そのうちには、そういうものがなくて、自分で表現できるようになった人には、そんなものは使いません。だけど、私たちもいろいろな国々を旅行するときに、小旅行するときにでも、カンパセーションブックを持っていくでしょう、ハンドブックを。こういうときにこういうものを片言で言おうとかね、いうふうにして行くのではありませんか。あるいは、あそこのお店は、日本語のわかる人がいてくれる店だというふうに、わかってそこの店を選んで行くとかというふうにする。それと同じことをやるわけです。こんなふうに御理解いただくと、TEACCHは、TEACCHがノースカロライナでやっているような診断評価のプロセスを、TEACCHセンターを中心にやって、そして学校に広げていって、TEACCHセンターからそれぞれの場にコンサルタントがコンサルテーションに出かけていくというふうなシステムを全体的に今することはできないかもしれません。今すぐにはですね。そういうモデルができつつあるところはありますけど

も、いきなりそれはできないだろうというふうに思います。その一つの理由は、日本流に言いますと、乳幼児健診は例えば厚生省の管轄で保健所でね。保育園は厚生省で、幼稚園は文部省で、学校が文部省で、卒業後の就労に関するさまざまな問題は労働省でというふうな感覚で、おつおつ切れておりますから難しい。TEACCHはそれをTEACCHとして、TEACCHモデルとして幼児期から恐らく老年期まで、一貫したシステムの中で行われるという大きな利点があるだろうというふうに思いますですね。これは恐らくそれぞれの国によってそれぞれの国の便利な、文化に合わせて便利のように応用法を考えていかななくてはいいだろうというふうに思います。ノースカロライナほどTEACCHをですね、そういう意味では部局を超えて、部局際的にですね、一つのコンプリヘンシブな、トータルな、しかもフォーマルなプログラムとして承認されているものは、なかなか世界にはないと思いますが。でも、いくつかの国は国を挙げてTEACCHを導入するようになっておりますから、そういう国はできるんだろと、確かに思います。ですから、日本は日本の文化に合わせた応用の仕方をしていかなければならないと、これは現実かと思います。大体私に御質問いただいたことはお答えしたつもりでおりますが。○司会(寺崎) はい、ありがとうございました。それではエッケンロード先生に、学校の1日の流れ、つまりスケジュールとかグループ活動とか、そういうことに対しての御質問、それからIEPを作成されるときに、保護者との意見が一致しにくいことはなかったでしょうか。もし一致しなかったらどういうふうにされますかということ。それから席に着いて学習をするにはどういうふうにされたら席に着いて学習するようになったかというようなこと。それから先生の個人的なことなんです、先生が先生になられたきっかけとか、TEACCHとの出会いとか、そういうところもお聞きしたいというアンケートがございました。そ

れと、昨日の講演の中で、移行期等、14歳ごろというお話があったというようにあるんですが、14歳ごろというのは一般的には思春期と思われませんが、何か関係あるのかというような御質問もございました。それとIEPに関してなんですが、昨日資料で配られましたA君ですね。アレックス君なんですが、アレキサンダー君の事例について、通常の学級、普通学級との交流をどういうふうにしているのか。それから特に抜き出して学習の場を設けることについての評価等について教えていただきたいと。昨日の資料だと思いますが。そういうことについてお願いいたします。

○エッケンロード まず最初に学校での1日の一般的な流れということから話をしたいと思います。センターにおいて子どもを教えておりますので、大体30分の単位で繰り返されます。まず、子どもたちは学校に来るわけですが、登校、通学して、そして9時ごろには学校に参ります。そして30分ほど大体朝食を食べる手伝いをしたり、あるいはトイレ、そういった関連のこと、そして子どもによってはバスで2時間ぐらい揺られて来る子もいますので、1日のための準備、そういうものを最初に行います。それから9時半から10時まで、これが午前中のグループ活動の時間でありまして、その時間帯においては、例えばこの日、あるいはこの月、この年のこの月のこの日に何をするかということを話し合います。これはすべて視覚的に行われて、あるいはこういう特殊学級に行くんだということを学んだりします。そしてまたその日の昼食に関して絵で見せて、その絵について、どの昼食を食べるかということを選んでもらったりします。あるいは歌を楽しむ、歌を歌ってそれを楽しむ時間もあります。そしてまた毎月ある一定のその時間帯には、スタディーをする時間がありまして、そのスタディーの時間帯においては、ストーリーを教えたり、あるいはゲームによって単語を学んだりします。ただ、ここで1点指摘しておく必要があると思いますのは、たとえ

グループの時間であっても、やはりその子ども一人ひとりの個別のスタイルがあるということです。すなわち非言語的な形で理解が必要な子どもに対してはそう行うようにいたします。すなわち絵とかを見せたりしますし、あるいは何かコミュニケーションのために何かエレクトロニック的な電子的な装置が必要な場合には、そういったものも使う。あるいは言葉で理解する子どもの場合には言葉を使ったりするという、いろいろなスタイルがそれぞれ子ども子どもで違います。10時から10時半が最初のワークセッションです。そして6人の子どもに対して2人のティーチャーがいます。そしてその2人の先生一人ひとりに、そこにつく、専任でつく1人の子どもがいて、そしてきのうお見せしましたように、3人は一緒になってそのセンターでやると。そしてもう一人はコンピュータに取り組むという形になります。1対1で教える場におきましては、ある特定のスキルを、きのうお見せしたようなプロジェクトという形で教えていく。あるいはもう少し高学年になりますと、実際勉強の内容を教える場にもなります。先ほどのワークシステムの質問にも関連しますので、ここで答えたいと思いますが、1対1の教える場においては、その何らかの技能をあるいはスキルを教えていく。それに対してその子どもがマスターしていくと、今度は自立して独自のワークボックスに行ってそれができるわけです。ですから例えば何かをまとめる、パッケージ化する、あるいは組み立てる、あるいは本を読む、何かをつくる。そういうことですね。ワークセッションは10時から10時半と申し上げましたが、実際のワークは、作業は20分から25分ぐらいて、そしてその後に5分ぐらいの休憩があって、自分が、子どもが遊ぶおもちゃを選んだり、あるいはそういう自由時間になるわけです。私の学校におきましては、実際にそういうスペシャルクラスに行く時間がございますので、みんなでこのグループとして行って、そのスペシャルクラスに参加し

ます。それは例えば音楽とか体育とかダンスとかドラマとか、あるいは図書館に行く。そういう科目の時間がありますけれども、それが10時半から30分間、11時まで行われます。そして戻ってきました、そこに行ってから戻ってきました、そして子どもが食べるものの準備をして、そのおやつを食べた後、今度は2回目のワークセッションがあるわけですが、それは最初の1回目のワークセッションと同じような形態。しかし先生が1対1でやる対象の子どもは、また違う子どもですね。その後にもまた3回目のワークセッションがあります。こういう形で必ず1日の間にみんな子ども一人ひとりが必ず先生からの1対1の時間を持てるようにしているわけです。そうやって、そうこうしておりますと12時半ぐらいになりますから、今度はカフェテリアに行って食べる。もしくは教室で昼食を食べても構わないことになっています。まだ数百人ぐらいおりますので、何百人かおりますので、自閉症の子どもたちがそうやって集まりますと、カフェテリアも相当騒がしくなりますから、帰って教室でその子たちと食べるということをして、そういった場合には、食べる食事のスキルに関してはもっと近くで見てやれることになります。そして昼食後に、今度はグループの時間となります。ここでボードゲームとか、今度は普通クラスの子たちを招待して、例えばアートとかあるいはクッキングとか、こういう時間に普通科のクラスの子たちを招待したりして、一緒にやったりするわけです。そしてその後、短い休憩がありまして、その休憩時間中にはバスタオルやマットで休んだりしますけれども、その間にその子どもたちの帰る準備をしたり、あるいはペアレントジャーナルという形で親との連絡簿がありますので、そのペアレントジャーナルを書いたりします。そして一番最後には、1日の一番最後には、子どもたちは外に行き遊びます。そういう形でそのチームとしてその週、ほぼ同じようなことを繰り返すわけですが、しかし例えばその行き

先のセンターを変えたりして違うところに行ったりすることがあります。それでは次の質問のIEPにかかわる話に移りたいと思いますが、IEPは非常に役に立つものでありますし、また必要な法律上の契約として必要な必須なものでありますね。しかしこれはIEPというのは、子どもがきちんと必要なサービスを受けれるようにするためのものです。しかし先生にとりましては、そういうポイントなのではなくて、先生にとりましてはその子どもをどういう方向性に向かわせていくのかというガイドになる、指針になるものであります。また先生対親ということで、親の心配の親の懸念から、その問題をどうしても解決できない場合、長時間にわたって解決できない場合には、それは学校側の方で仲裁者を立てて、仲裁努力をいたします。私自身は18年間教えておりますが、そういったことは今まで一度もありませんでした。やはり先生が親たちと非常に緊密な協力関係を持つということが非常に重要だと思います。実際にIEPを本格的に書く前に、親と一緒に、今年はこの子どもにここまでできるようになってもらいたいという点を、十分に話し合っておくということがやはり重要だと思います。そういう形でIEPにその目標というものを記すことによって、そういうデータを持つことによって、それによってやはり子どもが非常に苦心しているとき、あるいは非常にうまくやっているときというものがあるんだと思います。またそういうものが書いてあることによって、例えばその子どもが例えば家庭にいて、例えばクリスマス休暇とかそういう形で家庭にいる際に、その子どもの能力が退行してしまったということもわかるわけですね。そういう退行のあったような場合には、場合によりましては、通常アメリカの場合1年間で10カ月学校に行くということになっているんですけども、学校に就学する期間の延長ということで、場合によってはさらにもう少し長く勉強してもらうということも、退行した場合には必要になってく

る場合もあります。アレキサンダーの話ですが、毎日数時間学校に参ります。毎年学校の新学期になりますと、新しい学年になりますと、私はその教室、そしてその先生と会って話をし、自閉症について話をします。したがって、その教室の中でどういう構造を使っていくのかということも、その先生自身によく理解してもらうように、前もって説明しております。アレキサンダー君でありますけれども、私の教室から通常学級に行くときには、メモ、すなわちノートブックを持って出ます。そしてそのノートの表紙には2年生の教室に行くようにということが書かれて、そしてスケジュールもそちらに書かれております。そしてそのアレキサンダー君がその教室にいる期間のワークシステムといったものがその教室に行くときリストに書かれていて、それが手渡されます。ほかの教室の仲間と同じスキルを修得しようとし、そして、このワークシステムがリストになって渡されるわけですが、各活動、アクティビティーが終わると、彼はそこでチェックをして終了ということを記していきます。そして活動をすべて終了して、時間が来たらまた私の教室に戻ってきます。そして終了していないワークがあったとします。そういったものは、これはすべて残っている作業ということで、左のポケットに入れることになっております。私の教室に戻ってきたときの、もうこれはルーティンとなってるんですけども、その左のポケットに残っている作業があるかどうか、私にまず最初に見せることになっております。そしてその後、このワン・ツー・ワンのワークステーションがありますけれども、そこで1対1で終わっていない作業にとりかかって、そして終了させます。そして翌日その終了された作業というのは、これは終了したら右側のポケットに入れますので、それをまた翌日先生に見せることになっております。前期と比べて、アレキサンダー君でありますけれども、それほどIEPの範囲というのは広範なものではありませんでした。

というのも通常学級で、特に特殊学級のサポートなくしてできるものといったものは、IEPに含めなかったんです。さて、14歳のころの移行に関して述べさせていただきます。ちょうどこのころからIEPはシフトする、移行すると言います。すなわち学問的なところから、次に修了ということ考えた上でのIEPへと移行していくんです。もちろん学問的な作業というのは続けていくわけであり、将来仕事へという上では、こういった可能性が一番最適であるかということを考えながらIEPを移行させていきます。大体我々の学校制度のもとでは、3歳から22歳までが公立校の制度に入ることができます。大体16歳から17歳になりますと、一部は学校で過ごして、そして午後は職場で過ごす。すなわち先生に連れて行ってもらって職場で過ごすというような形態を通常とります。そして、なぜ教師になったのか、先生になったのかという御質問にお答えさせていただきます。さて、私が13歳から14歳のときだったんですけども、協会を通して情緒障害の人たちの入る州の施設で仕事を始めました。そこでの経験が非常に良かったということで、これは私の生涯の仕事にしようと思ったんです。ミシガンで特殊教育の学校、そして学位を受けまして、そしてその後にノースカロライナに移りました。そして10年間、知的障害児を教えてきました。同じ学校で自閉症児向けのプログラムがある学校で教えることができたというのも、非常に幸運だったと思っております。そういった自閉症のプログラムの子どもたちというのは、そこでの特殊クラスに入っていたんですけども。そして通常のインクルージョンの方に、通常の学級に入る前に私のクラスを経るというプロセスをとりました。そして1976年当時というのは、自閉症児向けのクラスというのは1学級しかなかったんですけども、それが現在は36までふえております。そして10年間、ですから私は知的障害の子どもたちを教えてきたわけでありすけ

れども、その10年後にはそこで自給自足型の自閉症プログラムの方へと移りました。さて、私、ウェイク郡の人間でありますけれども、そのTEACCHプログラムに関しましては非常に長い経験を持っております。実際にこのシステムの中に入って楽しまなかったという子どもを見たことはありません。必ずしも口頭で伝えてくれない場合もあるんですけれども、しかしその構造を楽しんでいるようです。ショブラー博士にもアレキサンダー君については伝えたんです。すなわち彼の家に行って、そしてTEACCHモデルをそこで設定しました。アレキサンダー君ですけれども、ちょうど遊んで、外で遊んで帰ってきたときに、ワークタスクはすべてもうお部屋に並んでいる。こちらに、左にこのワークがあって、そしてまた机も全部セットアップされてるのを見て、彼はすぐに机に座って「やった！」と喜んでおりました。大体これでお答えしたと思います。あとですね、食事に関してなんですけれども、偏食についても申し上げたいんですが。でもこれは医師の観点ではなくて、先生という立場から言いたいんですけれども、それはなぜ同じものを食べるかというのは、頑固になって、いじじになって食べているという場合もあります。ただ単純に変化は受け入れたくないというだけの場合もあります。ですから、その昼食のときにどういった構造化を我々を行っているかということ、お皿の上に一つだけ小さな固まりを乗付けると。ですから、まずこの一口を食べたら次に好きなものを食べられますよというふうに伝えます。そういった違うものを食べる、ないしは変化を受け入れるということが嫌だったわけでありまして、実際にその違ったものを食べると、楽しんで、喜んで食べているということがわかります。そうすると、今まで食べてこなかった違ったものをどんどんと加えていくことができます。その手法でかなり成功をおさめてきております。

○司会（寺崎） ありがとうございます。それ

では有澤先生、先ほどの件なんですが、個別の指導計画を立てるときに、保護者との間で何かあったり、また立てるときの工夫等ございましたらちょっとお話しください。

○有澤 じゃあまず今の質問から。私の学級では保護者の方と1学期なら1学期の指導について、まず最初の段階で面接したときに、この学期、お宅のお子さんに対してうちの学級でどんなことを望みますかと。どんなことを身につけてもらいたいのですかという要望を、なるべく具体的に聞くようにしています。我々が考えたその子に対するプログラムもお話をして、ある程度話し合いながら1学期間の目標を定めるというような方法で、個別の指導計画は立てています。日本における個別指導計画の現状というようなお話がありましたけれども、私、あえてこれからではないかなというふうに申し上げておきたいなというふうに思います。御承知のように新しい指導要領が公示されて、来年から移行期に入るわけですが、その中で盲聾養護学校の指導要領の中で、個別の指導計画を立てて教育を行うことが望ましいと初めて明文化されましたので、それを受けて、これから各地域、それぞれの学校で地域に合った独自の形で、いろいろな指導計画をつくれるのではないかなというふうに思います。実際にもう既にそういうものをつくって実践しているという話はたくさん聞いています。ある養護学校では、一人ひとりの子どもについて20枚ぐらい何か個別指導の計画を書くというのを聞いたことがあります。4月から書き始めて書くのが大変で、書き終わったころには夏休みになってしまって、すぐに2学期の目標を考えるというような話も聞いてますので。ぜひこれから使いやすい形、この2日間問題になっている連携を含めて、いろいろな意味でよりよい個別の指導計画のフォームというのを、いろいろなところで研究していただきたいなというふうに思います。それともう1点、TEACCHの考え方を日本に導入することの難しさみたいな

お話がありましたけれども、先ほど佐々木先生がおっしゃったように、私はまず TEACCH のシステムを全部を同じように日本でやるということは難しいと思っています。スタッフ的にもそういうものをそろえてということは、まず今の日本の教育のシステムでは難しいと思いますので、まず TEACCH の理念みたいなものを取り入れることから始めるというのが一番ではないかなというふうに思います。実際に学校の中で TEACCH の理念を取り入れられて、教材やいろんな構造化ということで、成功している例もいっぱいありますし、きょうフロアにいらっしゃる先生の中で、そういうことをもう既にたくさんやっていらっしゃる方もいっぱいいると思います。それから学校だけではなくて、就学前のいろいろな通園施設や、卒業後の施設、先ほどお話にあったヒガヤマ工房ですとか、東京でもそういう TEACCH の構造化を取り入れて成果を上げているという話をたくさん聞いています。私が日本で日本の文化に合って TEACCH を取り入れることの一番のポイントはですね、まず個に応じる、個性を尊重して個に応じる個別化ということを、どういうふうに受け入れるかとか、理解するかということが一つ大きなポイントだというふうに思っています。きのうもエッケンルード先生のお話の中で、いろんな部分でインディビュアライズと強調されてましたけども、日本の文化というのはどうしても個が中心ではなくて、集団であるとかそういうところに適応するということを大きく考えますので、まず個に応じるということがどういうことなのかということを、文化の違いとしてとか、感覚的にわかるということが難しいんだらうというふうに思います。例えばですね、私の学級は通級ですから、一人ひとりの子どもに応じた指導を最初からやっています。お母さん方も自分の子に対して、最大限のことをやってくれというふうに要求しますが。個に応じたことをやっていくと、どうしても一人ひとりの障害の程度が違いますから、

こちらのケアの仕方といいますか、指導の仕方もある一人ひとり違ってくるわけです。それは親に対しても一緒に、月1回の面接でお母さんを支えることができる人は月1回しかやらないのに、例えばもっと深刻な悩みを抱えているお母さんには2回も3回も面接をしたりしてます。それはもうまさに個に応じて対応してるわけなんですけど、必ずそういうことがあるとお母さん方というのは、あのお母さんは2回も面接してもらっているのに、何で私は1回なのというふうに、こういうふうに言ってくるわけですね。子どもの指導に対しても、例えば食事の問題で、給食をうちの学級で食べて帰る子もいれば、食べないで在籍の学級に帰って食べる子もいるわけです。そうすると、あの子は何で先生の学級で給食を食べるのに、私の子は食べさせてくれないのと言うわけですよ。どうしても日本の感覚で同じじゃないと不安になる。全く同じことをしてもらわないと差別されているような感覚を持つ。こういう感覚がまずインディビュアライズという考えを理解する妨げになっているんじゃないかなというふうに思います。これは親だけではなくて、我々教師もなかなか理解しにくい部門だろうと思います。どうしても一斉教育の中でやっていると、同じことをやらないと差別しているんじゃないかというような不安に陥ってしまいます。ですから、例えば1年生の子にはみんな同じ1年生の漢字ドリルと計算ドリルを与えて同じにやらせなきゃならないというふうに思うし、例えば自閉症の子で、まだまだそういうレベルではないのに、自分のクラスだから同じテストを与えてやらせなきゃ差別してるんじゃないかという感覚に教師もなってしまうという。そのあたりの考え方をまず切りかえて、個に応じるということが本当の意味でどういうことなのか、まずその意識改革をしなければ TEACCH の考えを取り入れていくところに難しさが残るんじゃないかなというふうに思います。あと、環境を変えようと、渥美先生の話で、両方から近づくというよう

な、子どもを育てることと、周りの大人とか周りの環境が自閉症の子どもに合わせていくという話がありましたけども、この辺も日本では非常に難しいところなんじゃないかなと思います。もちろんそれは自閉症に対する世の中の人々の理解をもっともって促していくということになるんでしょうけれども、ある程度構造化された学校とか施設の中で、自閉症の子どもが安定して過ごせても、やっぱり一歩外にその建物から出ると、不安や混乱をもたらす情報というのはあふれかえっていますので、それをみんな自閉症の子どもが理解しやすいように近づけるということは、日本の社会ではまだまだ難しいことで、我々教師はそれよりもやっぱり子どもがそれに適応できるだけの力を育てる方が早道じゃないかなというふうに思いますので、どうしても教師の考えは子どもを日本の社会に合わせて、そこに適応できるように変えなきゃいけないというふうにとらわれてしまいますので、それが個別化とか TEACCH の考えから外れて、過剰な訓練的なことになったり、パニックをもたらすような結果になっていくんじゃないかなというふうに思います。ちょっと時間がないと思いますので、あまり長くはしゃべりませんが、大体お答えになったでしょうか。

○司会（寺崎） どうもありがとうございました。ショブラー先生、今の有澤先生の考え、御意見を聞きながら、先生の方から何かございましたらお願いしたいと思います。それともう一つ、先ほどありました重度の子どもたち、全く視覚的な手がかりが理解できないというような子どもたち、こういう子どもたちにどういうふうにしていったらいいんだろうかということと、それとこの TEACCH はほかの障害の子どもたちにも利用できるのではなかろうかというような御意見が出ておりますので、そのあたりからもお話をお願いいたします。

○ショブラー いろいろな質問内容がありましたけれども、しかしやはりその中を中心として貫い

ている一番の問題点は、やはりコミュニケーションということだと思いますね。すなわち重度の障害児におけるコミュニケーションの問題、あるいはいろいろなスペクトルにおいて、例えばパニックの状況におけるコミュニケーションということだと思います。今まで既にほかのスピーカーの方々が、自閉症の人たちに対するコミュニケーションの点についてはいろいろと触れられましたけれども、しかしやはり何といっても一番大きな問いかけは、質問は、非常にこれは複雑な問題なんですけれども、どうやって自閉症を持っている人たちに対して彼らを理解していけるか、あるいはどういうふうに対処していけばいいのか、教えていけるのかという話ですね。この点はこのような実際のミーティングの会合のおきましても、個人的に私に当てはまる話でありまして、すなわち皆さんは私の英語を聞かれる。しかしその理解は結局は通訳を介して、その通訳の話し方とか声の調子に大きく影響を受けながら私の話を理解しているわけです。したがってこのような会議において、たとえ非常に優れた優秀な通訳を使っていたとしても、何かもし万が一わからない、理解できない点があった場合には、ではなぜこうなのかというふうに考えてしまうわけですね。だから私が今、この場において日本語を理解できない、あるいは日本語を話すことができないという例えをですね、その例を自閉症と同じようなものであるというふうに考えて、それを例にして考えてみますと、シンプルに申し上げれば2点問題があるわけです。すなわち私は皆さんの言ったことを理解できない、理解しにくいという問題。それから私が話すことは皆さんがなかなか理解しにくいという問題。この二つがあるわけですね。私の方から不明確な不明瞭な、あるいは合意できないような意見、ちょっと一致できないような、そういった話をする中で、皆さんはそういう困難の中でパニックに陥ると。そういう中で選択肢はたくさん、いくつかあるわけです。まず1点目の選択肢と

しては、もう目を閉じてしまって何か別なことを考えるという選択肢。しかしそういう形であたかも集中しているかのように見せかける、あるいはメモをとると。しかし実際メモをとっているかのようなふりは、実は友人に手紙を書いているだけであって、ふりをしているわけですね。ですから対処方法としては、すなわちそういったときにどういうふうに振る舞うかに関しては、パニックの状況に対していろいろなやり方があるわけです。そういうやり方でも社会的には十分につじつまが合うような形では対応はしているわけですね。よくこの自閉症において問いかける、投げかけられる質問があるんですが、それはこういうことがあります。常に少し思い出すんですが、2カ国語教育に関してです。すなわち例えば日本やあるいはヨーロッパから、外国から私どもの学校に子どもが来た場合、そのような場合に果たして英語で教えるべきなのか、それとも母国語で教えるべきなのか、あるいは学校と家庭では違う言語にするべきなのか否かという、2カ国語の問題です。私は常にそれに対してこう思いました。すなわち自閉症児に対してそういった重度障害の子どもであっても、やはりメインの言語で、その1日の中で一番よく使われているその子どもにとっての言葉を使うのが適切であろうと考えたわけです。ところがですね、私はある非常に高機能な若い男性に会いまして、彼は英語もフランス語も両方とも習得して、両方ともうまく話せるようになったわけです。彼はアスペルガー症候群ということで、社会的な状況においてはいろいろな理解になかなか乏しかった、社会的な面においてはいろいろと難しい困難もあったわけです。すなわち、そういう2カ国語で教えられたことが、社会的な面においての問題の原因になっているのかどうかということを聞いてみたわけです。彼の答えは、いや、そんなことは全然ありませんと。自分がその社会的な問題に直面すると、そうするとほかの人たちはすぐそれは2カ国語を話すからだ、2カ国語

の問題、外国語を話しているという言葉の問題なんだというふうに決めたがる。ですから彼の場合は、そういう社会的な困難さをカバーしていくためのものが、その2カ国語というものであったわけです。あるいはまた別の方向で考えてみれば、佐々木先生と非常に長い長年のおつき合いをさせていただいて、もう18年間一緒に会って、そしていろいろな仕事、研究をしてまいりましたが、その間、私の日本語で言うと、ほぼゼロのレベルからほんのちょっと、ほんの少しだけ上昇しただけです。しかし佐々木先生の側から言えば、英語は非常にいいわけです。完璧ではないかもしれないけれども、非常に彼の英語はすばらしい。だから常にお互いに、本当にお互いによく理解し合えたのかどうかとは思いますが、しかしむしろ佐々木先生たちはそのTEACCHに対して非常によく理解していらっしゃる。これは私どもが考えたり、あるいは知っていたり、あるいは説明したりすること以上に、場合においてはよく御存じなわけです。それはなぜかということ、単に言葉だけではなくて、佐々木先生が観察を通してよくそれを吸収していらっしゃるからです。すなわち、この場合は言葉という壁を乗り越えて、バイパスしてその観察という行動によって、非常に深い理解に達していらっしゃるわけですね。また彼の午前中の佐々木先生のTEACCHにかかわる話を伺っても、TEACCHに対して非常によく深く理解していらっしゃるということがわかるわけです。先ほどの質問の内容に戻るわけですが、重度障害の子ども、そして特に視覚的なコミュニケーションが難しい、そういった障害を持つ子どもに対して、どういう形でコミュニケーションの壁を乗り越えられるのか。ということで、今までこの会の中で、ずっとコミュニケーションの難しさということが連続してあらわれてきておりますが。しかし例えばじゃあこの場で私が水を飲みたいと。ところが水という日本語を、相当する日本語を知らないわけですね。

そうするとパニックの状況に陥りかねない。しかし多分これが水であろうから、私はこれに指を指すわけですね。ところがこれは水ではないかもしれない。何らかの商業的であると、パニックになってしまうかもしれませんが。そうすると、またさらに若干のパニックに、そんなに極度のパニックではありませんが若干のパニックになってしまうかもしれない。その次のレベルに行けば、私はもうこの水のボトルを持って掲げてだれかに示すわけですね、このボトルを。ですから、その写真を使うこともできる、あるいはそのもの自体を使うこともできる。あるいはその材料を使うこともできる。いろんなものを使うことは可能なわけです。ですから重度障害の子どもになれば、実際にやはり、より物を使うという傾向が強いと思います。すなわち水を飲みたいと思えば、実際のそのコップを、グラスを手に掲げて、そして水が欲しいということを示すわけです。先ほど渥美先生の方が、連携の重要さということを訴えておられました。これはこの会議のテーマでもありますけれども。やはりその連携が重要なのは、やはりそのコミュニケーションをする際において、両方の人たちが理解をしておく必要がある。すなわち言葉のかわりにこの子どもはこういうシンボル、記号を使う、あるいはほかの方法を使うんだという、その方法を知っておく必要があるわけです。だからこそ連携が必要なわけです。また有澤先生の話の中で、異文化の比較、そういう異なる文化を比較して考えていくというのは非常に困難が生じるという話が出てまいりました。しかしその連携という意味合いにおきまして、またコミュニケーションという意味合いにおきまして、このようにシステムが機能し得るわけですから、日本でもきっと必ずうまくいくと確信しております。コミュニケーションとして今申し上げましたように、たとえ重度障害の子どもであっても、そういったものを使って示していくことができる。例えばコートを使って外出していくということを示す

ことができるわけですね、外出するんだということ。あるいはボールを使ってプレイ、あるいはレクリエーションを示すということができる。したがってそういった形でものを、具体的なものを使うことによって、そういう方法によってコミュニケーションをとっていくことが可能である。そしてそれによってスケジュールを示すことも可能であるわけです。また質問の二つ目の要素として、パニックの状況、特に例えば重度障害の子どもにおいて、そのパニックが重度の場合において、どういうふうに対処するかという話が出てまいりました。この質問は日本のみならず、アメリカでも非常によく出る質問です。すなわち重度障害の子どもたちなどにおいて、そういう適応が非常に不適応な行動において、非常に困難な状況において、どういうふうに対処すればいいのかという質問ですね。マサチューセッツ州にあるんですが、そういう重度な自閉症の人たちだけを集めた施設がございます、ところがございます。ここでは例えば自分の肉を、自分の体の一部をかんで、あるいはそこを裂こうとしたり、あるいはもう話をすることもできない。もう対処することが非常に困難な、そういった重度障害の自閉症の人たちが住んでいる、レジデンシャルセンターがございます。最も重度な、重篤な自閉症の人たちが集まっているマサチューセッツのところですが。その学校のディレクターがハーバード大学の卒業で、恩師はドクタースキナーでした。ドクタースキナーは行動心理学で有名な、刺激反応による行動心理学で有名な先生ですね。すなわち行動習性型で、最も重度な障害を持つ人たちを集めて、1カ所に集めて、そしてその行動習性、行動学でとらえていくということをこの大学は考えたわけです。そういった重度障害の、重度の障害を持つ人たちを集めたそういう行動管理においては、その考え方としては自害の行動をとる、すなわち自分をたたくとか、あるいは自分をかんでしまう。そういう自己破壊型の行動をとる人たちに対して、逆の行

動をとるという形で行動管理をしていこうと。こういった手法をとったかという、電気ショックを与えたり、ないしは非常に強い匂い、アンモニアのような匂いをかがせる、ないしは非常に鋭い音を聞かせる、ノイズを聞かせるというような対処法をとった。これが非常に重度の行動が出た場合に成功例をおさめていることを示しております。ただ、こういった逆をとるような行動ないしは対処によりまして、居住者の一人が、これは9年から10年ほど前なんですけれども、亡くなりました。ということで、このプログラムに参加するということを、マサチューセッツ州として停止することになったんです。そちらの学級にいた居住者、人々をノースカロライナに移行するに当たりまして、1人当たり年間15万ドルまでなら支払えるということで、州の方からノースカロライナにいる私の方に連絡がありました。私どもはそれを受け入れなかったんです。というのも我々はですね、最も重きを置いていたのが、そして最も努力をし、プログラムの時間をすべて割いていたのは、初期段階から対応していこうと。すなわちこのような対処法には最初から同意していなかった。参加していなかったわけでありまして。すなわち環境修正という手法を初期からとっておりまして。すなわちその教室の中での変化、そしてまた地域社会での変化を行っていこうと。これは特にコストがかからないわけでありまして。そしてその中で、環境の中での理解を深めていこうという手法をとってきました。こういった重度の行動を示していた人々でありますけれども、こういう人たちの出身元である環境というのは、そういった修正をするということには全く配慮されていないような環境から出てきた人ばかりでありました。御質問といったものは非常に短かったんですけども、延々と答えてしまったんですけども、重度障害の方でコミュニケーションの問題があり、そこからパニックが発生して、それにどう対処するかという御質問だったと思います。すなわちこの

コミュニケーションの問題というのは、どういったことがコミュニケーションされているか理解できない、またどうやって答えていいかわからない。そういったところからパニックに陥って発生するという問題であります。そして連携といったことも重要でありますし、初期段階からの構造化も重要であります。すなわち教育環境としても、保護者、学校、そしてまたクリニック、そしてディレクター、エージェンシー等でありましてけれども、そういったところ、そのような機関が一緒になってそういった教室環境をつくりだすということが、そういった重篤な問題を軽減するのに役立つと考えております。ですから御質問なさった方というのは、初期段階からもしですね、そういったコミュニケーションを促すような環境を持っていれば、かなりパニック状態に陥るといって、それも過度なパニック状態に陥るといって問題は避けられたのではないかと。たとえ知的障害があったとしても、たとえ言語能力に限界があったとしても、回避、ある程度はできたのではないかと思います。手短かにですね、有澤先生が文化の違いについて述べられましたので、それについて少しコメントさせていただきます。それは TEACCH を実践している者として、アメリカからこのように2人参りました。そのときに講演の中でも話をいたしましたし、また佐々木先生の方からもまとめがあったと思いますけれども。そういった文化の違いで導入が難しいのではないかとということに対しましても、ちょっとコメントさせていただきます。有澤先生がおっしゃったことを正しく理解していればということで確認をしたいんですけども、個別主義、個人主義という形で例えばですね、ほかとは違うことをしたら、またそこでえこひいきをしているのではないかとと思われる。すなわち月1回の面接の人と、月3回の面接がある人と、そして他人を自分と違う扱いを受けているとうらやむというような環境があるということをおっしゃったかと思います。有澤先生、これを聞いたら驚

かれるかもしれません。アメリカも同じ状況です。例えばですね、私どもが自閉症児向けのプログラムを展開するその作業に入ったときに、ほかの発達障害児を持っている親御さんが、何で自閉症ばかりに着目するのだということで不平不満を言ったものであります。それができるまでというのは、自閉症児を持つ保護者の方々が、何で自閉症に対して十分な配慮がないのか、サービスがほかの知的障害に比べて関心のレベルが低いのかという苦情を言っていたのです。渥美先生がこの会議を企画するときに考えたことと、結局同じ結論になったわけでありまして。どういうことになったかというと、ここでノースカロライナの自閉症協会ということでの組織といったものがあつたんですけども、それが保護者の組織、グループとしてあつた。しかしそこでの嫉妬を避けるために、ほかの障害児を抱える御家族と連携するようになったわけでありまして。精神遅滞とかその他の発達障害児のグループと一緒にあって、最終的にどういった組織になったかというと、PPHCというペアレンツ・アンド・プロフェッショナルズ・オブ・ハンディキャップド・チルドレンという、この障害児を抱える親、そしてプロフェッショナルの組織といったものができ上がりました。これでもう、えこひいき、すなわちほかの人をうらやむというような問題は対処できたということになるんでしょうか。それでもやはり不満は残るわけでありまして。ですから答えはノーなんですありますが、しかし何らかの経路、それが管理できる経路ができ上がったと言えます。すなわち人間として連携し合って、そして助け合って何かを生み出しているという作業が、そしてその経路ができ上がったと言えます。私がなぜ日本を訪問するのを、これだけ楽しんでいるか、楽しみにしているかと申しますと、日本文化にこれは根づいているのではないかと思います。すなわち連携について日本に来るとより学ぶことができる。すなわち欧米社会にはない連携といったものが日本にはあるんで

はないかと思います。これはもう人間の本来の問題であるとも言えます。文化によって、そのあらわれる形態は違うかもしれませんが、本質は同じだと思います。ちょっと話し過ぎましたので、こちら辺でやめたいと思いますけれども、これでお答えになっているのではないかなと思っております。別に文化の違いを軽視しているわけではありません。その文化に合った形で適応させていく必要があるかと思います。ですから、その国ごとの調整は必要でしょう。でもこういったグローバルな連携もできるのではないかと思います。というのも私も日本に来るたびにいろいろなことを学びます。そしてそれをまた交流という形で学んでアメリカに適用することもできるわけでありまして。文化の違いがあるからこそ、逆に新鮮に映るものもたくさんありますので、教えて、そして学ぶこともできるという、非常にいいトレードオフではないかなと思っております。この重度の障害の場合に、パニック状態に陥るその原因の95%は、コミュニケーションの問題によるものと考えられます。そういったコミュニケーションの問題というのは十分対処できる問題でありまして、その個人個人みんなが使える、理解できるところにコミュニケーションを調節、合わせればいいわけでありまして。

○司会（寺崎） ありがとうございます。ショブラー先生には最後にすばらしいまとめをしていただいたように思います。時間の関係で、フロアからと考えていたんですが、ショブラー先生、すばらしいまとめをしていただきましたので、これで終わりたいと思います。どうも先生方、ありがとうございました。（拍手）それでは御退席をお願いいたします。2日間にわたりましたプログラムはこれで終了いたしました。引き続き閉会式に移りますので、そのままお待ちください。では早速閉会式を始めます。主催者を代表いたしまして、国立特殊教育総合研究所総合企画調整官、阪内宏一がごあいさつを申し上げます。

○阪内総合企画調整官 2日間のセミナーに本当に御参加をいただきまして、ありがとうございます。私どもの特殊教育総合研究所というのは、特殊教育に関しましてさまざまな課題について総合的に研究している機関でございます。今回のセミナーの中では情緒障害研究部を中心に、自閉症児の教育の課題を今年度のテーマとして取り上げさせていただいたところでございます。今回のこの2日間のプログラムが、皆様方にとっていささかでもお役に立てば、私どもにとって大きな喜びでございます。このセミナーの中で私はショプラー教授が、ミラクル、奇跡は私たち自身だとおっしゃったことが非常に印象的でした。皆様方にとってはどんな思いで受けとめられましたことでしょうか。私たちは今後ともさまざまな課題に対して研究を中心に、研究所として

の活動を充実していきたいと考えているところでございます。どうぞ皆様方もお戻りになられまして、それぞれのお立場でそれぞれのお取り組みを充実していただければと思いますし、ますます充実したものになることを心からお祈りを申し上げます。本当に2日間、お疲れさまでございました。どうもありがとうございました。お気をつけてお帰りくださいませ。ありがとうございました。(拍手)

○司会(寺崎) どうもありがとうございました。これもちまして、国立特殊教育総合研究所主催による平成11年度特殊教育普及セミナーの全日程を終了いたします。皆様方の御協力と熱心な御参加に心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

参考資料

参考資料 1 米国ノースカロライナ州の I.E.P. の事例

参考資料 2 連携システム用ノート
「拡大版母子手帳」の試作版

Sample: low functioning child

Wake County Public School System

warehouse #395-30-00330

DEC 5/HCA Part 1

Final

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM

Student name: Ben Sutor Date: 12-10-97

PRESENT LEVEL OF PERFORMANCE

Include specific description about academic performance, behavior, social/emotional development, learning styles, physical limitations, and other relevant information.

Ben is an adorable seven year old Caucasian male. According to evaluation results dated May 1997, Ben is functioning in the severe and profound range of mental retardation. Ben also displays a number of characteristics of autism. A working diagnosis of Dyspraxia is used for treatment in his private therapy setting; Developmental Therapy Associates, Inc.

Functional Academics: According to the Bayley Scales of Development and the Carolina Curriculum Ben is consistently functioning at a 12 month developmental level. Ranges shown in testing began at the 3-6 month level with peaks at the 18 month level.

Prereadiness skills fall in the sensorimotor area. Ben is able to place objects in a container, reach for items, respond to his image in a mirror, build a 3-cube tower and scribble. Ben is also pulling pegs from a pegboard, and pulling apart pop beads. He is able to open a 1 inch twist top container. He is working on tasks requiring the use of his visual skills in order to retrieve the materials he either wants or needs in order to complete a task.

Weaknesses include visual perception, imitation, attention, memory and functional object use.

Adaptive Behavior: At the time of evaluation Ms. Sutor completed the interview edition of the Vineland Adaptive Behavior Scales and the evaluators completed the SIB-R (Scales of Independent Behavior).

On the Vineland Parent Interview Ben fell in the trainable range with age scores at the 1 to 2 year level which is commensurate with his functioning level. Strengths were noted by Ms. Sutor in the area of socialization while weaknesses were noted in communication and daily living skills.

On the SIB-R Ben again fell into the age range of 1.7 years. Domestic and gross motor skills were his strengths, personal living, social interaction and language comprehension were very limited and weaknesses were community living, fine motor skills and social skills.

Social/Emotional Development: Ben is a very sweet little boy. He often seeks out affection from his caregivers. He does not appear to attend to any visual or auditory information in a consistent manner. He does tolerate a small group although he does not indicate he is aware of the others in the environment. He does allow children near him in the various centers in the room. He does enjoy "rough and tumble" play and tickling. He enjoys climbing and manipulating himself through our play structure. Ben also enjoys climbing and sliding on the outdoor equipment. There are times when we see inappropriate and unprovoked emotional responses such as laughter, tantrum, or ear banging. Ben demonstrates no fear in novel situations and safety factors are a concern. Ben is often resistive to direction but will respond with firm simple command combined with gesture or touch.

Sample

Communication: Ben is currently demonstrating very limited communication skills. He does fairly well if allowed to use an object such as a fork in requesting food, he will hand the fork along with good eye contact while he awaits the food. He is also demonstrating some communication through gesture such as taking my hand in order to continue a pleasurable game. Ben is also vocalizing a number of vowel sounds. Ben is currently being exposed to pictograms on his schedule, overlays placed strategically around the room, and eat and drink cards at snack. We have seen no success at this time with use of the pictures. He does however increase his level of performance when the pictogram is accompanied by voice output such as with the device he is currently testing known as the "Big Mack". Receptive language is slightly higher than expressive. Ben does follow routine commands accompanied by gesture and or sign.

Fine Motor Skills/Self-Help Skills: Ben shows significant delays in his fine motor skills and hand/body strength. He does receive therapy sessions three times per week through Developmental Therapy Associates, Inc. Ben demonstrates strengths in reach, grasp and release. He is able to use a pincer grasp to pick up objects. He will squeeze with three fingers, will scoop and pour. Is demonstrating emerging skills for using both hands together to open containers and pull apart objects. Ben is demonstrating a continued preference for using his right hand. He will attempt a task with the tool in his left hand and will shift to his right if he is unsuccessful. Ben is doing a good job of attempting to stab his food, he is able to accurately touch the food but is still having difficulty piercing the food. He does often require assistance to turn the fork appropriately in his hand. Ben does manipulate his clothing during toileting routine. He is able to carry his lunch bag, wear his backpack, open and close doors and attempt to hang bookbag on a hook.

Imitation: Imitation is a relative weakness for Ben. We need to begin at the level of incorporating Ben's attention to us in imitation of his actions and build to Ben imitating others. We are needing to work very consistently in all aspects of the day on Ben's visual attention, scanning and perception.

Medical: According to Mrs. Sutor, Ben is making marked improvements in his health. He is tolerating a much wider array of foods. He is more active. However a continued concern with Ben's health as it is related to his academic achievements does continue. Medical reports shared with the school state that periods of regression, due to past neurotoxicity, will continue to occur. Ben needs to routinely be retaught concepts.

Given to parent: 12/10/97

Sample: classroom: language

DEC 5/HCA
(Part 1)

Final

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: WashingtonB. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12 10 97 To: 12 9 98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will respond appropriately to simple classroom commands, attend to sounds, and will indicate simple needs.

D. Communication

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given gestural or visual and verbal cue Ben will follow commands: a) come here b) put c) pick up d) open 70% of the time	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	
2. Given verbal cue Ben will follow commands: a. come here b. put c. pick up d. open 70% of the time	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	
3. Given various sounds (bell, timer, voice, clap) Ben will identify through eye gaze the source of the sound with 70% accuracy.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Sample: classroom: language

Final

DEC 5/1994
(Part I con't)

A. STUDENT Ben Suter

C. CONTINUATION OF GOALS

B. Date: From: 12 10 97
(mo.) (day) (yr.)
To: 12 9 98
(mo.) (day) (yr.)

D. Communication

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
4. Given desirable objects placed on the table out of reach Ben will respond to the cue "look" sustaining his gaze 3 seconds 70% of the time. <i>at the</i>	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
5. Given safety related incident Ben will inhibit his activity when told "NO" or "STOP" 80% of the time. <i>Ben look</i>	Data collection by classroom staff Data collection by Speech Therapist Karen Christy	Quarterly beginning 12-10-97	
6. Ben will indicate wants/needs through a variety of means: a) manipulating others b) objects c) augmentative communication 70% of the time	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

Sample: classroom fine motor

Final
DEC 5/HCA
(Part I)

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: WashingtonB. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12-10-97 To: 12-9-98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Following teacher direction and/or demonstration, Ben will complete fine motor classroom tasks.

D. Fine Motor

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given sensory mediums (playdoh, clay, etc.) Ben will <u>imitate</u> poking, squeezing, pulling apart, dragging tool 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	
2. Given verbal direction Ben will tolerate hand/hand assistance from adult while squeezing in order to manipulate loop scissors 90% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	
3. Given direction through imitation Ben will build a tower consisting of six 1 inch blocks with success in 90% of trials.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	
4. Given a demonstration Ben will engage in joint attention while strengthening hand muscles; by participating in tug of war with materials such as: a). towel with knots b). wooden dowel for a period of 20 seconds 80% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97.	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Sample: classroom: fine motor

Final

DEC 5/HCA
(Part 1 con't)

A. STUDENT Ben Suitor

C. CONTINUATION OF GOALS

D. Fine Motor

B. Date: From: 12 10 97
(mo.) (day) (yr.)
To: 12 9 98
(mo.) (day) (yr.)

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
5. Given a demonstration Ben will be able to use one hand to stabilize while the other hand manipulates by: a) making suds with egg beater b) pounding pegs into styrofoam with success 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
6. Give vertical surface Ben will be able to draw using: a) free movement b) tracking horizontal line c) continuous circles d) imitate vertical stroke e) imitate horizontal stroke f) work with very simple template with 70% success.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
7. Given a physical prompt Ben will locate a very large dot as his beginning point with 80% success.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

*Sample: classroom: cognitive
imitation and visual response*

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

DEC 5/1994
(Part I)

Final

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: Washington

B. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12-10-97 To: 12-9-98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will demonstrate the ability to visually attend to classroom activities for a defined period of time with prompting minimal.

D. Imitation and Visual Response

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given identical settings for Ben and the instructor, (example bells in front of both) Ben will: a) stop his activity b) look in response when instructor imitates Ben's actions 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
2. Given identical setting for Ben and the instructor Ben will continue an activity and then stop to see if that instructor will imitate his actions 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
3. Given direction to <u>look</u> instructor will hold a desired item near his/her face and in response Ben will give eye contact in order to receive the object 100% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
4. Given direction Ben will visually attend to moving objects: a) bubbles b) train c) remote control car for 45 seconds 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	

* There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

sample: imitation and visual response final

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

DEC 5/HCA
(Part 1 cont'd)

A. STUDENT Ben Sutor

B. Date: From: 12 10 97
(mo.) (day) (yr.)

C. CONTINUATION OF GOALS

To: 12 9 98
(mo.) (day) (yr.)

D. Imitation & Visual Response

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
5. Given task with materials spread about the work table, Ben will visually attend to and reach for the materials in order to complete the task with success in 90% of trials.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	
6. Given direction Ben will visually track desired object that is moved as he reaches for it. For 30 seconds in 70% of trials.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning <u>12-10-97</u>	

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

Sample! classroom: functional academics

final
DEC 5/HCA
(Part I)

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: WashingtonB. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12-18-97 To: 12-9-98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will complete simple functional academic tasks with only 4 per session prompts minimal physical.

D. Functional Academics

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given minimal physical prompt Ben will sort 2 objects by: a) shape b) object c) color within self-correcting tasks with 70% accuracy.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
2. Given minimal physical prompt Ben will match 2 pictures to pictures with: a) photo b) representational drawing with 70% accuracy.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
3. Given minimal physical prompt Ben will demonstrate 1:1 correspondence with 80% accuracy.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

DEC 5/HCA
(Part 1)

Sample: classroom: work behaviors

Final

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: WashingtonB. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12/10/97 To: 12/9/98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will complete functional work tasks with verbal and gestured prompts.

D. Work Behaviors

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given gestural and verbal prompts Ben will put his work tasks into a "finish" tub 100% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
2. Given verbal and gestural prompts Ben will clean up toys off floor and put on shelf 80% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
3. Given need for transition, Ben will use his photo, placed on a card, along with gestural and verbal prompts, to transition area with success in 70% of trials.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
4. Given need for transition, Ben will use an object paired with a pictogram, along with gestural and verbal prompt, in order to complete that transition with 70% success.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
5. Given minimal physical assistance Ben will remain seated for a 20 minutes work session with 4 or fewer prompts 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

Sample: Classroom: Social Skills
INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: WashingtonB. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12-10-97 To: 12-9-98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will demonstrate appropriate transition and group behaviors/

D. Social

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given minimal physical prompt Ben will walk in the hall while holding a peer's hand, maintaining the hold 50% of the distance traveled.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
2. Given minimal physical prompt Ben will walk down the hall following an adult 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
3. Given minimal physical prompt Ben will sit quietly in a group for 5 minutes without physical prompt 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
4. Given greeting during structured group setting Ben will give: a) eye contact OR b) stop activity momentarily 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

DEC 5/HCA
(Part I)

sample: classroom: self-help

final

Student: Ben Sutor
Grade: 1 School: Washington

B. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From: 12/10/97 To: 12/9/98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

A. Present Level(s) of Performance (Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

C. Annual Goal(s): Ben will complete self-help activities with minimal physical assistance and consistent daily routine.

D. Self-help

Short-Term Instructional Objectives in Measurable Terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1. Given minimal physical prompt Ben will carry snack plate to table ^{table} with verbal prompt 80% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
2. Given minimal physical prompt Ben will place his cup in the "finish" tub with verbal prompt 80% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
3. Given minimal physical prompt Ben will stab food with fork with 70% success.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
4. Given minimal physical prompt Ben will self-initiate toileting through gesture, manipulation, or augmentative communication 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	
5. Given minimal physical prompt Ben will zip coat with large pull 70% of the time.	Data collection by classroom staff	Quarterly beginning 12-10-97	

*There must be short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

White Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

Sample: Adapted Physical Education

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Warehouse # 395-30-00330
DEC 4 HCA Part 1 (1 of 2)

INDIVIDUAL EDUCATION PROGRAM

Student Name: Ben Sutor

Duration: Special Education Services and Related Services

From: ¹²~~11~~/¹⁰~~20~~/⁹⁷~~97~~ To: ¹²~~11~~/⁹~~19~~/⁹⁸~~98~~ SC
(Mo.) (Day) (Year) (Mo.) (Day) (Year)

PRESENT LEVEL OF PERFORMANCE

Include specific description about academic performance, behaviors, social/emotional development learning styles, physical limitations, and other relevant information.

Ben attends a self contained Physical Education class taught by a Regular Physical Educator and helped by the classroom assistants. He enters the gymnasium and then is helped through the opening warmups consisting of crunches and a several minute walking program. He is showing a better understanding of this routine but continues to need physical assistance to stay on task. Ben does not interact very often with his peers and seems content working alone or with an assistant. Some of his biggest needs are to learn to look at his target, focusing on his activity for an extended time (up to 30 seconds) stepping in opposition, and following through. Ben learns well through hand over hand assistance as long as verbal cues being repeated several times. During the activity, Ben continues to need constant verbal cues. He is showing improvement but consistency is still lacking.

Parent Copy Sent ☒ Given
(circle one)

¹²~~11~~/¹⁰~~20~~/⁹⁷~~97~~
(date)

9/97

DRAFT _____

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Sam Ple
ADAPT
PHYSICAL ED
DEC 5/1984

Student: Ben Sutor

Grade: School: Washington Elem.

Present Level(s) of Performance:

(Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses.)

Annual Goals:

B. Date of Beginning and Duration of Special Education
From: 12.10.97 To 12.10.98

Ben will demonstrate the components of two handed side arm strike.

Short-Term Instructional Objectives in measurable terms

Responsible person for giving instruction:

1. Ben will demonstrate the prep position, independently in 2/3 trials: a) grip: dominant hand over non-dominant b) eyes on target c) feet shoulder width apart d) side orientation e) bat behind the dominant shoulder

2. Ben will transfer his weight forward (may step) in 2/3 trials independently.

3. Ben will demonstrate hip and/or spine rotation independently while swinging in 3/4 trials.

4. Ben will make contact with a stationary ball (on tee) using a level swing throughout movement in 3/4 trials independently.

5. Ben will make contact with a slow pitched ball using a level swing throughout the movement in 3/4 trials independently.

Evaluation Procedures	Evaluation Schedule	Date Attained (Must be completed for each objective)
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98- 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	

DRAFT

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM(IEP)

ADAPT
PHYSICAL EDU

DEC 5/98

Student Ben Sutor

Grade: School: Washington Elem.

Present Level(s) of Performance:

(Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses)

Annual Goals:

Ben will demonstrate the components of an overhand throw.

Short-Term Instructional Objectives in measurable terms

Responsible person for giving instruction:

1. Ben will demonstrate the prep position of the overhand throw in 2/3 trials independently:
a) eyes on target b) side orientation c) elbows flexed and hands together.

2. Ben will demonstrate full extension of the throwing arm in 2/3 trials independently.

3. Ben will independently demonstrate the ability to step forward with the opposite foot in 2/3 trials.

4. Ben will demonstrate the ability to rotate hips and shoulder independently in 2/3 trials.

5. Ben will demonstrate the correct follow through in 2/3 trials independently.

Evaluation Procedures	Evaluation Schedule	Date Attained (Must be completed for each objective)
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98- 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	
4 Formal Assessments	1/15/98-3/19/98 6/5/98-11/19/98	

Sample: Speech and Language Therapy Final

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Warehouse # 395-30-00330
DEC 4 HCA Part 1 (1 of 2)

INDIVIDUAL EDUCATION PROGRAM

Student Name: Ben Sutor

Duration: Special Education Services and Related Services

From: 12 / 10 / 97 To: 12 / 09 / 98
(Mo.) (Day) (Year) (Mo.) (Day) (Year)

PRESENT LEVEL OF PERFORMANCE

Include specific description about academic performance, behaviors, social/emotional development learning styles, physical limitations, and other relevant information.

Ben attends speech and language therapy three times per week. Currently targeted goals are establishing eye contact, following single step commands, requesting and imitation. During snack, Ben indicates the need for more food by either an approximated sign for "more" (Claps his hands) or a battery operated switch with voice output. During other activities, such as blowing bubbles, playing with toys and reading books requesting is inconsistent. Therapy tasks are often interrupted and abandoned due to Ben's attempts to get up from his seat and leave the therapy room. Continuous redirection is necessary throughout the therapy session. Ben continues to demonstrate needs in the areas of requesting wants, establishing eye contact, following single step commands and imitating gestures and signs.

Parent Copy

Sent/Given:
(circle one)

12 / 10 / 97
(date)

9/97

~~Draft~~ ¹²⁻¹⁰⁻⁹⁷
Sample: speech and language therapy
 INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Final
 Warehouse #395-30-00320
 DEC 4 / IICA Part 1 (2 of 2)

Student: Benjamin Sutor Grade: 1

A. Duration: Special Education and Related Services

School: Washington ElementaryFrom: 12-10-97
(mo.) (day) (yr.)To: 12-09-98
(mo.) (day) (yr.)

B. Annual Goal: Ben will improve his functional communication skills in the areas of following one and two step commands, indicating wants and needs and imitating motor actions

Short-Term Instructional Objectives stated in Measurable Terms (with criteria for each objective)	Evaluation Procedures (per objective) [How]	Evaluation Schedule (per objective) [at least quarterly]	Date Reviewed/ Progress Noted (per objective)
① Ben will follow a) single step b) two step commands with 70% accuracy with visual and/or verbal cues (example: "sit and eat, give, open" etc.)	Data collection by speech therapist on percent correct	11/5/98 3/19/98 6/5/98 11/19/98	
② During an activity, Ben will indicate wants by motor requests with 70% accuracy (example: moving others' hands to request "help")	Data collection by speech therapist on percent of requests made	11/5/98 3/19/98 6/5/98 11/19/98	

* There must be at least two short-term instructional objectives for each annual goal(s).
 Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

Parent Copy: Sent/Given: 12/10/97
 (check one) (date)

9/97

Sample: Speech and language therapy

Warehouse #395-30-00320
DEC 4/HCA Part 1 (2 of 2)

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP)

Student: Ben Suter Grade: 1

School: Washington Elementary

A. Duration: Special Education and Related Services
From: 12-10-97 To: 12-09-98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

B. Annual Goal: Ben will imitate his functional communication skills in the areas of following one and two step commands, indicating wants and needs and imitating motor actions.

Short-Term Instructional Objectives stated in Measurable Terms (with criteria for each objective)	Evaluation Procedures (per objective) [How]	Evaluation Schedule (per objective) [at least quarterly]	Date Reviewed/ Progress Noted (per objective)
③ Ben will imitate signs and gestures with 50% accuracy (example: the sign for eat, drink) when provided with: a) physical /visual /verbal cues b) visual /verbal cues c) verbal cue only	Data Collection by speech therapist on percent of correctly imitated signs and gestures	1/5/98 3/19/98 6/5/98 11/19/98	
④ Ben will select an object named from a group of two with 70% accuracy (example: food, toys, objects of colors)	Data Collection by speech therapist on percent of correct Selection	1/5/98 3/19/98 6/5/98 11/19/98	

* There must be at least two short-term instructional objectives for each annual goal(s).
Use one sheet for each annual goal. Present Level of Performance needs to be completed once.

Parent Copy: Sent Given: 12/10/97
(date) (date)

Sample: Occupational therapy

Rinal

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

warehouse # 395-30-00330
DEC 5/HCA Part 1

INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM

Student Name: Ben Sutor

Date: 12-10-97

PRESENT LEVEL OF PERFORMANCE

Include specific description about academic performance, behaviors, social/emotional development, learning styles, physical limitations, and other relevant information.

Ben is a sweet 18-month-old boy. He presents a mild tone, but demonstrates adequate postural stability and control. He also demonstrates adequate bilateral upper extremity strength to participate in a variety of activities in the classroom and on the playground. He demonstrates good dynamic balance skills to transition through a variety of movement positions from the floor to standing. He demonstrates adequate upper extremity control to reach and grasp. Ben is able to insert and remove pegs from a perforated board and can use a pin to place coins in a narrow slotted container. He can squeeze a variety of sponges in water play; his hands are prompting to squeeze the sponge. Ben can isolate his index finger and has increased finger and hand strength. Ben shows emerging skills of using his hands together. He holds a writing instrument in a loose pronated finger-tip grasp and will make marks on paper. He uses both hands, but seems to have an emerging right hand preference. Ben can maintain visual attention if interested in the task. Otherwise, he needs to be prompted to visually attend. He exhibits consistent and variable arousal level. On the Revised Developmental Motor Scales - Fine Motor Section 8/96 he scored an age equivalency of 18 months (see eval. for results).

White Copy: Special Education Record
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teacher

given to
parent
12/10/97

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Wake County Public Schools
Sample Occupational Therapy
INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP) (Part 1)

DEC 5/HCA

Student: Ben Suter
Grade: _____ School: Whittington

A. Present Level(s) of Performance
(Summarize evaluation results including strengths and needs of behavioral weaknesses):

B. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From 12 10 97 To 12 9 98
(mo.) (day) (yr.) (mo.) (day) (yr.)

C. Annual Goal(s) Ben will demonstrate more
flexible bilateral hand usage and
control to complete array of
tasks

Short-Term Instructional Objectives in measurable terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
1) Ben will stabilize a container with his left hand and hold a "scoop" with his right hand, scoop and pour out of 5 trials 80% accuracy. 2) Ben will use both hands together to string large beads (1/2" or larger) 30% accuracy. 3) Ben will use both hands accurately when pouring/cueing independently over the table in left hand.	1) Student Demonstration through Target Clinical Observation & data collection 2) Student Demonstration through Target Clinical Observation & data collection	quarterly beginning 12.10.97 quarterly beginning 12.10.97	

*There must be short-term instructional objectives for each annual
goal(s). Use one sheet for each annual goal. There must be present
level of performance documentation to support each annual goal.
Write Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teachers

WAKE COUNTY PUBLIC SCHOOL SYSTEM

Summit Occupational Therapy firm
INDIVIDUALIZED EDUCATION PROGRAM (IEP) (Part 1)

Student: Bessie
Grade: 1st School: Wake County

Present Level(s) of Performance
(Summarize evaluation results including strengths and needs or behavioral weaknesses):

B. Date of Beginning and Duration of Special Education and Related Services
From 12 (mo.) 10 (day) 97 (yr.) To 12 (mo.) 9 (day) 98 (yr.)

C. Annual Goal(s) Bess will demonstrate more mature bilateral hand usage and control to complete a variety of tasks

Short-Term Instructional Objectives in measurable terms	Evaluation Procedures (How)	Evaluation Schedule (When)	Date Attained (Must be completed for each objective)
3) Using left hand to stabilize the book bag and then right hand to hold zipper; Ben will assist with:	3) Student demonstration through frequent clinical observation & data collection	3 quarterly beginning 12.10.97	
4) Using zipper in book bag			
5) Using zipper in book bag 30% accuracy			
1) Using left hand to hold shoe strike and right hand to hold cap, Ben will remove 30% of shoes with 80% accuracy; given hand are hand away from verbal prompt / cues	4) Student demonstration through frequent clinical observation & data collection	4 quarterly beginning 12.10.97	
2) Using left hand to stabilize paper on a clipboard and right hand to hold pen; Ben will move pen over a 3" size paper placed in straight line	5) Student demonstration through frequent clinical observation & data collection	5 quarterly beginning 12.10.97	

These must be short-term instructional objectives for each annual goal(s). Use one sheet for each annual goal. There must be present, accuracy level of performance documentation to support each annual goal.

While Copy: Confidential File
Canary Copy: Parent
Pink Copy: Teachers

さんの

あゆみ

お誕生日

年 月 日

子どもと関わりのあった機関の一覧表（就学以前）

誕生		就学
年		
月 (日)		
歳		
保健・医療		
相談		
福祉・療育		
保育園・幼稚園・教育		

子どもと関わりのあった機関の一覧表（小学～中学生ころ）

小学校入学

中学校卒業

年	
月 (日)	
歳	
保健・医療	
相談	
福祉・療育	
保育園・幼稚園・教育	

子どもと関わりのあった機関の一覧表（中学卒業以降）

中学校卒業

年	
月 (日)	
歳	
保健・医療	
相談	
福祉・療育	
保育園・幼稚園・教育	

家庭での記録

養育の記録

[illegible]

[illegible]

記録した年月日	年	月	日	年齢	歳
できるようになってほしいこと					
その基礎となる、できていること					
家庭での対応・方針（家族内の役割なども）					
相談・連携した人・機関					
経過と今後の課題					

教育の記録

教育の記録 1 学校・学級一覧

期間	学校名・学級・担任・連絡先	受けた教育（特徴）
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()
年 月 日 年生 ~ 年 月 日 年生		通常・通級・特殊学級 養護学校 特徴 ()

教育の記録 2 総合

本シートの記録者

学校名 連絡先	
担任名	
入学（進学）日 年 月 日	
本記録に関する期間 年 月 日 ～ 年 月 日	
教育形態	1. 通常級 2. 養護学校 3. 特殊学級 4. 通級指導教室
指導形態	1. 個別 2. 集団 3. 個別中心＋集団 4. 集団中心＋個別 6. その他（ ）
保護者の願い	
本記録期間における子どもの実態・教育課題・教育内容・評価のまとめ	

教育の記録 3 開始時点（年間等）

本シートの記録者

記録した年月日	年	月	日	年齢	歳
引き継ぎ事項					
保護者からの情報					
子どもの実態について（学習面、生活・行動面など） できること； できそうなこと；					
教育の課題と指導目標（重点目標と実施計画）					
保護者・家庭との連携事項					

教育の記録 4 区切り・終了時点（年間等） 本シートの記録者

記録した年月日	年	月	日	年齢	歳
記録期間において実施した教育の内容（学習面、生活・行動面）					
記録機関における子どもの状態の変化について（学習面、生活・行動面：対応も含む）					
保護者家庭との連携・保護者からの情報					
今後の課題・引き継ぎ事項					
保護者の乾燥					

記録した年月日	年	月	日	年齢	歳
指導上のメモ					

医療・保健（健診）の記録

医療・保健機関受診歴

受診期間	受診機関名・担当者 (連絡先)	診断・主な検査 その結果と治療	受診頻度 もしくは入院期間
年 月 日 ~ 年 月 日 (外来・入院)	()	診断： 検査： 検査結果： 治療：	週・月・年 () 回 不定期 平均して 週・月・年 () 回
年 月 日 ~ 年 月 日 (外来・入院)	()	診断： 検査： 検査結果： 治療：	週・月・年 () 回 不定期 平均して 週・月・年 () 回
年 月 日 ~ 年 月 日 (外来・入院)	()	診断： 検査： 検査結果： 治療：	週・月・年 () 回 不定期 平均して 週・月・年 () 回
年 月 日 ~ 年 月 日 (外来・入院)	()	診断： 検査： 検査結果： 治療：	週・月・年 () 回 不定期 平均して 週・月・年 () 回
年 月 日 ~ 年 月 日 (外来・入院)	()	診断： 検査： 検査結果： 治療：	週・月・年 () 回 不定期 平均して 週・月・年 () 回

医療・保険機関の記録 1 (診断・留意事項など) 本シート記録者

1歳半健診： 年 月 日 年齢 歳	
健診の結果	
3歳時健診： 年 月 日 年齢 歳	
健診の結果	
<u>主な医療機関名・診療科・担当医（主治医） 連絡先</u>	
主訴・相談事項・保護者の希望	
主要診断名・診断者 診断年月日	
アレルギーの有無と抗原	血液型
予想される医療的に緊急の状態 （発作など）	対応措置
予想される医療的に緊急の状態	対応措置
家庭・他機関での留意事項	

医療・保健機関の記録 受診開始時点

本シート記録者

状態像（ 年 月 日頃）

検査結果

治療方針・治療

家庭での対応への助言など

医療・保健の記録 区切り(年間等)・終了時点 本シートの記録者

本記録の受診機関 (年 月 日頃 ~ 年 月 日頃)
期間中に実施した検査・治療
状態像・症状など(記録期間中の変化を中心に)
治療経過の評価・課題
保護者への説明・家庭での対応への助言など

平成 11 年度特殊教育普及セミナー実行委員

- ◎ 渥美 義賢 情緒障害教育研究部長
- 寺崎 裕志 情緒障害教育研究部情緒障害教育研究室長
- 大柴 文枝 情緒障害教育研究部情緒障害教育研究室主任研究官
- 是枝喜代治 情緒障害教育研究部情緒障害教育研究室主任研究官
- 東條 吉邦 分室長
- 廣瀬由美子 分室主任研究官
- 千川 隆 知的障害教育研究部重度知的障害教育研究室主任研究官
- 肥後 祥治 知的障害教育研究部中度知的障害教育研究室研究員
- 松本 廣 教育工学研究部教育工学研究室長
- 棟方 哲弥 教育工学研究部教育工学研究室主任研究官
- 石山 俊光 運営部庶務課長
- 佐藤 敏幸 運営部庶務課企画係長
- 岩川 史子 運営部庶務課専門職員
- 松本 竜大 運営部庶務課企画係
- 穴澤 順子 運営部庶務課企画係

◎ 委員長

○ 副委員長

平成 11 年度特殊教育普及セミナー報告書

「これからの自閉症児教育の課題と展望

— 社会自立を目指すトータルケアと特殊教育の役割 —」

平成 13 年 3 月 印刷・発行

編集・発行 国立特殊教育総合研究所

〒239-0841

神奈川県横須賀市野比 5-1-1

電話 0468-48-4121